

※ [# 「さんずい+ (壠-土へん-厂)」、第3水準1-87-25] 東綺譚

永井荷風

青空文庫

わたくしは殆ど活動写真を見に行つたことがない。

おぼろ気な記憶をたどれば、明治三十年頃でもあろう。神田錦町にしきちょうに在つた貸席錦輝館で、サンフランシスコ市街の光景を写したのを見たことがあつた。活動写真という言葉のできたのも恐らくはその時分からであろう。それから四十余年を過ぎた今日こんにちでは、活動という言葉は既にすたれて他のものに代かえられているらしいが、初めて耳にしたものが口馴なれて言いやすいから、わたくしは依然としてむかしの廢語をここに用いる。

震災のちの後、わたくしの家に遊びに来た青年作家の一人が、時勢におくれるからと言って、無理やりにわたくしを赤坂溜池ためいけの活動小屋に連れて行つたことがある。何でも其頃その非常に評判の好いものであつたというが、見ればモオパッサンの短篇小説を脚色したものであつたので、わたくしはあれなら写真を見るにも及ばない。原作をよめばいい。その方がもっと面白いと言つたことがあつた。

然し活動写真は老弱ろうじやくの別わかちなく、今の人の喜んでこれを見て、日常わへいの話柄わへいにしている

ものであるから、せめてわたくしも、人が何の話をしているのかと云うくらいのは分るようにして置きたいと思つて、活動小屋の前を通りかかる時には看板の画と名題には勉強めて目を向けるように心がけている。看板を一瞥すれば写真を見ずとも脚色の梗概も想像がつくし、どういう場面が喜ばれているかと云う事も会得せられる。

活動写真の看板を一度に最多く一瞥する事のできるのは浅草公園である。ここへ来ればあらゆる種類のものを一ト目に眺めて、おのずから其巧拙をも比較することが出来る。わたくしは下谷浅草の方面へ出掛ける時には必ず思出して公園に入り杖を池の縁に曳く。

夕風も追々寒くなつて来た或日のことである。一軒々々入口の看板を見尽して公園のはずれから千束町へ出たので。右の方は言問橋左の方は入谷町、いずれの方へ行こうかと思案しながら歩いて行くと、四十前後の古洋服を着た男がいきなり横合から現れ出て、

「檀那、御紹介しましょう。いかがです。」と言う。

「イヤありがとう。」と云つて、わたくしは少し歩調を早めると、

「絶好のチャンスですぜ。猟奇的ですぜ。檀那。」と云つて尾いて来る。

「いらぬ。吉原へ行くんだ。」

ぼん引びきと云うのか、源氏というのかよく知らぬが、とにかく怪し気な勧誘者を追払うために、わたくしは口から出まかせに吉原へ行くと言ったのであるが、行先の定さだまらない散歩の方向は、却かえつてこれがために決定せられた。歩いて行く中うちわたくしは土手下の裏町に古本屋を一軒知しっていることを思出した。

古本屋の店は、山谷堀さんやぼりの流が地下の暗渠あんきよに接続するあたりから、大門前おおもんまへ日本ほんづつみ堤ぼし橋はしのたもとへ出ようとする薄暗い裏通に在る。裏通は山谷堀の水に沿うた片側町で、対岸は石垣の上に立続く人家の背面に限られ、此方こなたは土管、地ち瓦がわら、川土、材木などの間屋が人家の間に稍やや広い店口を示しているが、堀の幅の狭くなるにつれて次第に貧ますしげ気げな小家いえがちになつて、夜は堀にかけられた正しょう法ほう寺じ橋はし、山谷橋さんやばし、地方橋じかたばし、髪洗橋かみあらいばしなどという橋の灯ひがわずかに道を照すばかり。堀もつき橋もなくなると、人通りも共に途絶えてしまう。この辺で夜も割合におそくまで灯あかりをつけている家は、かの古本屋と煙草を売る荒物屋ぐらいのものであろう。

わたくしは古本屋の名は知らないが、店に積んである品物は大抵知しっている。創刊当時の文芸倶楽部ククラブか古いやまと新聞の講談附録でもあれば、意外の掘出物だと思わなければならぬ。然しわたくしがわざわざ廻り道までして、この店をたずねるのは古本の為ためではな

く、古本を鬻ぐ亭主の人柄と、廓外の裏町という情味との為である。

主人は頭を綺麗に剃った小柄の老人。年は無論六十を越している。その顔立、物腰、言葉使から着物の着様に至るまで、東京の下町生粋の風俗を、そのまま崩さずに残しているのが、わたくしの眼には稀覯の古書よりも寧ろ尊くまた懐しく見える。震災のころまでは芝居や寄席の楽屋に行くと一人や二人、こういう江戸下町の年寄に逢うことができた――たとえば音羽屋の男衆の留爺やだの、高嶋屋の使っていた市蔵などという年寄達であるが、今はいずれもあの世へ行ってしまった。

古本屋の亭主は、わたくしが店先の硝子戸をあける時には、いつでもきまって、中仕切の障子際にきちんと坐り、円い背を少し斜に外の方へ向け、鼻の先へ落ちかかる眼鏡をたよりに、何か読んでいる。わたくしの来る時間も大抵夜の七八時ときまっているが、その度毎に見る老人の坐り場所も其の形も殆どきまっている。戸の明く音に、折かんだまま、首だけひよいと此方へ向け、「おや、入らっしゃいます。」と眼鏡をはずし、中腰になって坐布団の塵をぽんと叩き、匍うような腰付で、それを敷きのべながら、さて丁寧に挨拶をする。其言葉も様子もまた型通りに変りがない。

「相変らず何も御在ません。お目にかけるようなものは。そうそうたしか芳譚雑誌があ

りました。揃そろつちや居りませんが。」

「為ためながしゆんこう永春江の雑誌だろう。」

「へえ。初号がついて居りますから、まアお目にかげられます。おや、どこへ置いたかな。」と壁際に積重ねた古本の間から合がつぽん本五六冊を取出し、両手でばたばた塵をはたいて差出すのを、わたくしは受取つて、

「明治十二年御届としてあるね。この時分の雑誌をよむと、生命いのちが延のびるような気がするね。魯文珍報ろぶんしんぱうも全部揃つたのがあつたら欲しいと思つてゐるんだが。」

「時々出るにや出ますが、大抵ばらばらで御在ましてな。檀那、花月新誌はお持合せでいらつしやいますか。」

「持つています。」

硝子戸の明く音がしたので、わたくしは亭主と共に見返ると、これも六十あまり。頬ほのこけた禿はげ頭あたまの貧相な男が汚れた縮しまの風呂敷包を店先に並べた古本の上へ卸しながら、

「つくづく自動車はいやだ。今日はすんでの事に殺されるところさ。」

「便利で安くてそれで間違いがないなんて、そんなものは滅多にないよ。それでも、お前さん。怪我アしなさらなかつたか。」

「お守まもりが割れたおかげで無事だった。衝突したなア先へ行くバスと円タクだが、思出してもぞつとするね。実は今日鳩ヶ谷はとやの市いちへ行つたんだがね、妙な物を買った。昔の物はいいね。さし当り捌はげくち口くちはないんだが見るとつい道楽がしたくなる奴さ。」

禿頭は風呂敷包を解き、女物らしい小紋の単衣ひとえと胴拔どうぬきの長襦袢じゆばんを出して見せた。小紋は鼠地の小浜ちりめん、胴拔そでの袖にした友禅染も一寸ちよつと変つたものではあるが、いずれも維新前後のものらしく特に古代という程の品ではない。

然し浮世絵肉筆物の表装とか、近頃はやる手文庫うちばの中張りとか、又草双紙くさぞうしの帙ちつなどに用いたら案外いいかも知れないと思つたので、其場の出来心からわたくしは古雑誌の勘定をするついでに胴拔の長襦袢一枚を買取り、坊主頭の亭主が芳譚雑誌の合本と共に紙包にしてくれるのを抱えて外へ出た。

日本堤を往復する乗合自動車に乗るつもりで、わたくしは暫く大門前の停留場に立っていたが、流しの円タクに声をかけられるのが煩うるさいので、もと来た裏通へ曲り、電車と円タクの通らない薄暗い横町をえらひえらみ歩いて行くと、忽ち樹の間から言問橋あかりの灯あかりが見えるあたりへ出た。川端の公園は物騒だと聞いていたので、川の岸までは行かず、電燈の明るい小径こみちに沿うて、鎖の引廻してある其上に腰をかけた。

実は此方こつちへの来がけに、途中で食しょく麵めん麩ぼと鐘かね詰づめとを買い、風呂敷ふろしきへ包んでいたので、わたくしは古雑誌と古着とを一つに包み直して見たが、風呂敷がすこし小さいばかりか、堅い物と柔いものとはどうも一緒にはうまく包めない。結局鐘詰だけは外がい套たうのかくしに収め、残の物を一つにした方が持ちよいかと考えて、芝生の上に風呂敷を平たいらにひろげ、頻しきりに塩あんばい梅ばいを見ていると、いきなり後うしろの木蔭かげから、「おい、何をしているんだ。」と云いさま、サアベルの音と共に、巡査が現れ、猿臂えんびを伸してわたくしの肩を押えた。

わたくしは返事をせず、静に風呂敷の結むすび目を直して立上ると、それさえ待どしいと云わぬばかり、巡査は後からわたくしの肱ひじを突き、「其方そつちへ行け。」

公園の小径をすぐさま言問橋ことわしの際きわに出ると、巡査は広い道路の向側に在る派出所へ連れて行き立番の巡査にわたくしを引渡したまま、急いそがしそうにまた何処どこへか行つてしまった。

派出所の巡査は入口に立つたまま、「今時分、何処から来たんだ。」と尋問に取りかか
つた。

「向むこうの方から来た。」

「向むこうの方とは何方どつちの方だ。」

「堀の方からだ。」

「堀とはどこだ。」

「真土山まつちやまの麓ふもとの山谷堀という川だ。」

「名は何と云う。」

「大江匡。」と答えた時、おうえただす 巡查は手帳を出したので、「匡ただすはこは匡に王の字をかきます。一

タビ天下ヲ匡スと論語にある字です。」

巡查はだまれと言わぬばかり、わたくしの顔を睨にらみ、手を伸していきなりわたくしの外套ぼたんの釦しるしをはずし、裏を返して見て、

「記号しるしはついていないな。」つづいて上着の裏を見ようとす。

「記章しるしとはどう云う記章です。」とわたくしは風呂敷包を下に置いて、上着と胴着チョツキの胸を一度にひろげて見せた。

「住所は。」

「麻布区御筆筒町一丁目六番地。」

「職業は。」

「何なんにもしていません。」

「無職業か。年はいくつだ。」

「己つちのとうの卯です。」

「いくつだよ。」

「明治十二年己の卯の年。」それきり黙っていようかと思つたが、後あとがこわいので、「五十八。」

「いやに若いな。」

「へへへへ。」

「名前は何と云つたね。」

「今言いましたよ。大江匡。」

「家族はいくたりだ。」

「三人。」と答えた。実は独身であるが、今こんにち日までの経験で、事実を云うと、いよいよ怪あやましまれる傾かたむきがあるので、三人と答えたのである。

「三人と云うのは奥さんと誰だ。」巡查の方がいい様に解釈してくれる。

「噢かかアとばばア。」

「奥さんはいくつだ。」

一寸窮こまつたが、四五年前まで姑しぼらく関係のあつた女の事を思出して、「三十一。明治三十

九年七月十四日生 丙ひのえうま 午 ……。」

若しも名前をきかれたら、自作の小説中にある女の名を言おうと思ったが、巡査は何にも云わず、外套や背広のかくしを上から押え、

「これは何だ。」

「パイプに眼鏡。」

「うむ。これは。」

「鐘詰。」

「これは、紙入だね。鳥渡ちよつと出して見せたまえ。」

「金がはいって居ますよ。」

「いくら這入はいっている。」

「サア二三十円もありましようかな。」

巡査は紙入を抜き出したが中は改めずに電話機の下に据えた卓子テイブルの上に置き、「その包は何だ。こつちへ這入はいってほめて見せたまえ。」

風呂敷包を解くと紙につつんだ麵麩と古雑誌まではよかったが、胴抜なまめかの艶しい長襦袢の片袖がだらりと下るや否や、巡査の態度と語調とは忽たちまち一変して、

「おい、妙なものを持っているな。」

「いや、ははははは。」とわたくしは笑い出した。

「これア女のきるもんだな。」巡査は長襦袢を指先に摘つまみ上げて、燈火にかざしながら、わたくしの顔を睨み返して、「どこから持って来た。」

「古着屋から持って来た。」

「どうして持って来た。」

「金を出して買った。」

「それはどこだ。」

「吉原の大門前。」

「いくらで買った。」

「三円七十銭。」

巡査は長襦袢を卓子の上に投捨てたなり黙ってわたくしの顔を見ているので、大方警察署へ連れて行って豚箱へ投込むのだろうと、初はじめのようこつちにからかう勇氣がなくなり、此方も巡査の様子を見詰めていると、巡査はやはりだまっただまわたくしの紙入を調べ出した。紙入には入れ忘れたまま折目の破れた火災保険の仮証書と、何かの時に入用であつた戸籍

抄本に印鑑証明書と実印とが這入っていたのを、巡査は一枚々々静にのべひろげ、それから実印を取って篆てんこく刻した文字を燈火あかりにかざして見たりしている。大分暇がかかるので、わたくしは入口に立ったまま道路の方へ目を移した。

道路は交番の前で斜に二筋に分れ、その一筋は南千住、一筋は白髯橋しろひげばしの方へ走り、それと交叉して浅草公園裏の大通が言問橋を渡るので、交通は夜になつてもなかなか頻ひんぱん繁であるが、どういふことか、わたくしの尋問されるのを怪しんで立止る通行人は一人もない。向側の角のシャツ屋では女房らしい女と小僧とがこつちを見ていながら更に怪しむ様子もなく、そろそろ店をしまいかけた。

「おい。もういいからしまいたまえ。」

「別に入用なものでもありませんから……。」つぶや「呟きながらわたくしは紙入をしまい風呂敷包をもとのように結んだ。

「もう用はありませんか。」

「ない。」

「御苦労さまでしたな。」わたくしは巻煙草も金口のウエストミンスターにマッチの火をつけ、かわり薫だけでもかいで置けと云わぬばかり、けむり烟を交番の中へ吹き散して足の向くまま言

問橋の方へ歩いて行つた。後で考えると、戸籍抄本と印鑑証明書とがなかったなら、大方その夜は豚箱へ入れられたに相違ない。一体古着は気味のわるいものだ。古着の長襦袢が崇りそこねたのである。

二

「失踪」と題する小説の腹案ができた。書き上げることができたなら、この小説はわれながら、さほど拙劣なものでもあるまいと、幾分か自信を持っているのである。

小説中の重要な人物を、種田順平という。年五十余歳、私立中学校の英語の教師である。

種田は初婚の恋女房に先立たれてから三四年にして、継妻光子を迎えた。

光子は知名の政治家某の家に雇われ、夫人付の小間使となつたが、主人に欺かれて身重になつた。主家では其執事遠藤某をして後の始末をつけさせた。其条件は光子が無事に産をしたなら二十個年子供の養育費として毎月五拾円を送る。其代り子供の戸籍については主家では全然与り知らない。又光子が他へ嫁する場合には相当の持参金を贈ると云うよう

な事であつた。

光子は執事遠藤の家へ引取られ男の児を産んで六十日たつか経たぬ中うちやはり遠藤の媒ななかだ介ちで中学校の英語教師種田順平なるものの後妻となつた。時に光子は十九、種田は三十歳であつた。

種田は初めの恋女房を失つてから、薄給な生活の前途に何の希望をも見ず、中年ちかづに近くに従つて元氣のない影のような人間になつていたが、旧友の遠藤に説きすすめられ、光子母子おやこの金にふと心が迷つて再婚をした。其時子供は生れたばかりで戸籍の手続もせずにあつたので、遠藤は光子母子の籍と一緒に種田の家に移した。それ故のち後になつて戸籍を見ると、種田夫婦は久しく内縁の關係をつづけていた後、長男が生れた為、初めて結婚入籍の手続をしたもののように思われる。

二年たつて女の児が生れ、つづいて又男の児が生れた。

表向は長男で、実は光子の連子つれこになる為ためとし年が丁年になつた時、多年秘密の父から光子てもとの手許に送られていた教育費が途絶えた。約束の年限が終つたばかりではない。実父は先年病死し、其夫人もまたつづいて世を去つた故である。

長女芳子と季児すえこ為ためあき秋の成長するに従つて生活費は年々多くなり、種田は二三軒夜学校

を掛持ちして歩かねばならない。

長男為年は私立大学に在学中、スポーツマンとなつて洋行する。妹芳子は女学校を卒業するや否や活動女優の花形となつた。

継妻光子は結婚当時は愛くるしい円顔であつたのがいつか肥満した婆ばばとなり、日蓮宗に凝りかたまつて、信徒の団体の委員に挙げられている。

種田の家は或時は宛さながらら講中の寄合所、或時は女優の遊び場、或時はスポーツの練習場もよろしくと云う有様。その騒さわがしさには台所にも鼠ねずみが出ないくらいである。

種田はもともと気の弱い交際嫌いな男なので、年を取るにつれて家内の喧騒には堪えられなくなる。妻子の好むものは悉ことごとく種田の好まぬものである。種田は家族の事については勉めて心を留めないようにした。おのれの妻子を冷眼に視るのが、気の弱い父親のせめてもの復讐ふくしゅうであつた。

五十一歳の春、種田は教師の職を罷やめられた。退職手当を受取つた其日、種田は家にかえらず、跡をくらましてしまつた。

是これより先、種田は嘗かつて其家に下女奉公に來た女すみ子と偶然電車の中で邂かいこう逅し、其女が浅草駒形町あさくさこまがたまちのカフエーに働いている事を知り、一二度おとずれてビールの酔を買つ

た事がある。

退職手当の金をふところにした其夜である。種田は初て女給すみ子の部屋借をしているアパートに行き、事情を打明けて一晩泊めてもらった……。

*

*

*

それから先どういう風に物語の結末をつけたらいいものか、わたくしはまだ定案を得ない。

家族が搜索願を出す。種田が刑事に捕えられて説諭せられる。中年後に覚えた道楽は、むかしから七ツ下りの雨に警え^{たし}られているから、種田の末路はわけなくどんなにでも悲惨にすることが出来るのだ。

わたくしはいろいろに種田の墮落して行く道筋と、其折々の感情とを考えつづけている。刑事につかまって拘引^{こういん}されて行く時の心持、妻子に引渡された時の当惑と面目なさ。其身になつたらどんなものだろう。わたくしは山谷の裏町で女の古着を買った帰り道、巡査につかまり、路端の交番で厳しく身元を調べられた。この経験は種田の心理を描写するに

は最も都合の好い資料である。

小説をつくる時、わたくしの最も興を催すのは、作中人物の生活及び事件が開展する場所の選択と、その描写とである。わたくしは^{しばしば}屢人物の性格よりも背景の描写に重きを置き過るような誤に^{あやまち}陥ったこともあった。

わたくしは東京市中、古来名勝の地にして、震災の後新しき町が建てられて全く旧觀を失った、其状況を描写したいが為に、種田先生の潜伏する場所を、本所か深川か、もしくは浅草のはずれ。さなくば、それに接した旧郡部の^{ろっこう}陋巷に持つて行くことにした。

これまで折々の散策に、砂町や亀井戸や、小松川、^{てらしままち}寺島町あたりの景況には大略通じているつもりであつたが、いざ筆を着けようとすると、^{にわか}俄に觀察の至らない気がして来る。曾て、（明治三十五六年の頃）わたくしは深川^{すさぎゆうかく}洲崎遊廓の娼妓を主題にして小説をつくつた事があるが、その時これを読んだ友人から、「洲崎遊廓の生活を描写するのに、八九月頃の暴風雨や海嘯の^{つなみ}ことを写さないのは杜撰^{ずさん}の甚しいものだ。作者先生のお通いなすつた^{きのえねろう}甲子楼の時計台が吹倒されたのも一度や二度のことではなからう。」と言われた。背景の描写を精細にするには季節と天候とも注意しなければならぬ。例えばラフカジオ、ハーン先生の名著チタ或はユーマの如くに。

六月末の或夕方である。梅雨はまだ明けてはいないが、朝から好く晴れた空は、日の長いころの事で、夕飯をすましても、まだたそがれようともしない。わたくしは箸を攔くと共にすぐさま門を出で、遠く千住なり亀井戸なり、足の向く方へ行つて見るつもりで、
一先電車で雷門まで往くと、丁度折好く来合せたのは寺島玉の井としてある乗合自動車である。

吾妻橋をわたり、広い道を左に折れて源森橋をわたり、真直に秋葉神社の前を過ぎて、また姑く行くと車は線路の踏切でとまった。踏切の両側には柵を前にして円タクや自転車が幾輛となく、貸物列車のゆるゆる通り過るのを待つていたが、歩く人は案外少く、貧家の子供が幾組となく群をなして遊んでいる。降りて見ると、白髯橋から亀井戸の方へ走る広い道が十文字に交錯している。ところどころ草の生えた空地があるので、家並が低いので、どの道も見分のつかぬほど同じように見え、行先はどこへ続くのやら、何となく物淋しい気がする。

わたくしは種田先生が家族を棄てて世を忍ぶ処を、この辺の裏町にして置いたら、玉の井の盛場も程近いので、結末の趣向をつけるにも都合がよからうと考え、一町ほど歩いて狭い横道へ曲つて見た。自転車も小脇に荷物をつけたものは、摺れちがう事が出来ない

くらいな狭い道で、五六歩行くごとに曲っているが、両側とも割合に小綺麗な耳門のある借家が並んでいて、勤先からの帰りとも見える洋服の男や女が一人二人ずつ前後して歩いて行く。遊んでいる犬を見ても首環に鑑札がつけてあって、左程汚らしくもない。忽にして東武鉄道玉の井停車場の横手に出た。

線路の左右に樹木の鬱然と生茂った広大な別荘らしいものがある。吾妻橋からここに来るまで、このように老樹の茂林をなした処は一箇所もない。いずれも久しく手入をしないと見えて、匍いはのぼる蔓草つるくさの重さに、竹藪たけやぶの竹の低くしなっているさまや、溝際どぶぎわの生垣に夕顔の咲いたのが、いかにも風雅に思われてわたくしの歩みを引止めた。

むかし白髻さまのあたりが寺島村だという話をきくと、われわれはすぐに五代目菊五郎の別荘を思出したものであるが、今日こんにち日たまたまこの処にこのような庭園が残ったのを目にすると、そぞろに過ぎ去った時代の文雅を思起さずには居られない。

線路に沿うて売地の札を立てた広い草原が鉄橋のかかった土手際に達している。去年頃まで京成電車けいせいの往復していた線路の跡で、崩れかかった石段の上には取払われた玉の井停車場の跡が雑草に蔽おほわれて、此方こなたから見ると城址しろあとのような趣をなしている。

わたくしは夏草をわけて土手に登って見た。眼の下には遮るものもなく、今歩いて来た

道と空地と新開の町とが低く見渡されるが、土手の向側は、トタン葺ぶきの陋屋ろうおくが秩序もなく、端はてしもなく、ごたごたに建て込んだ間から湯屋の烟突えんとつが屹立きつりつして、その頂なきに七な八日頃の夕月が懸なつている。空の一方には夕栄ゆうばえの色が薄く残のこつていながら、月の色には早くも夜らしい輝あきができ、トタン葺の屋根の間々からはネオンサインの光と共にラデオの響こが聞え初める。

わたくしは脚あしもと下の暗くなるまで石の上に腰をかけていたが、土手下の窓々にも灯がついて、むさくるしい二階の内なかがすっかり見下されるようになったので、草の間に残つた人の足跡あとを辿たどつて土手を降りた。すると意外にも、其処はもう玉の井の盛場を斜に貫く繁華な横町の半程なかほどで、ごたごた建て連つた商店の間の路地口には「ぬけられます」とか、「安全通路」とか、「京成バス近道」とか、或は「オトメ街」或は「賑本通にぎわいほんどおり」など書いた灯がついている。

大分その辺を歩いた後、わたくしは郵便箱の立つている路地口の煙草屋で、煙草を買い、五円札の剩つり銭を待つていた時である。突然、「降くだつてくるよ。」と叫びながら、白い上ツ張かを着た男が向側のおでん屋らしい暖簾のれんのかけに馳かけ込むのを見た。つづいて割烹着かつぼうぎの女や通りがかりの人がばたばた馳かけ出す。あたりが俄に物気ものけだ立つかと見る間もなく、吹落

る疾風に葭簀よしずや何かの倒れる音がして、紙屑こみと塵芥ごみとが物の怪けのように道の上を走って行く。やがて稲妻いなづまが鋭く閃ひらめき、ゆるやかな雷らいの響につれて、ポツリポツリと大きな雨の粒が落ちて来た。あれほど好く晴れていた夕方の天気は、いつの間にか変ってしまったのである。

わたくしは多年の習慣で、傘かさを持たずに門を出ることは滅多にない。いくら晴れていても入梅中のことなので、其日も無論傘と風呂敷とだけは手にしていたから、さして驚きもせず、静にひろげる傘の下から空と町のさまとを見ながら歩きかけると、いきなり後方うしろから、「檀那だんな、そこまで入れてつてよ。」といひさま、傘の下に真白な首を突込んだ女がある。油あぶらの匂においで結むすつたばかりと知られる大きな潰島田つぶしまには長目に切つた銀系ぎんしをかけている。わたくしは今方通りがかりに硝子戸ガラスを明け放した女髪かみゆい結むすの店のあつた事を思出した。

吹き荒れる風と雨とに、結ゆいたて立たての鬘まげにかけた銀系の乱れるのが、いたいたしく見えたので、わたくしは傘をさし出して、「おれは洋服だからかまわない。」

実は店つづきの明い燈火に、さすがのわたくしも相合傘あいあいがさには少しく恐縮したのである。「じゃ、よくつて。すぐ、そこ。」と女は傘の柄につかまり、片手に浴衣ゆかたの裾すそを思うさままくり上げた。

三

稲妻がまたぴかりと閃き、雷がごろごろと鳴ると、女はわざとらしく「あら」と叫び、
一歩後れて歩こうとするわたくしの手を取り、「早くさ。あなた。」ともう馴れ馴れしい調子である。

「いいから先へお出で。ついて行くから。」

路地へ這入ると、女は曲るたび毎に、迷わぬようにわたくしの方に振り返りながら、やがて溝にかかった小橋をわたり、軒並一带に葭簀の日蔽をかけた家の前に立留った。

「あら、あなた。大変に濡れちまつたわ。」と傘をつぼめ、自分のものよりも先に掌でわたくしの上着の雫を払う。

「ここがお前の家か。」

「拭いて上げるから、寄っていらつしやい。」

「洋服だからいいよ。」

「拭いて上げるっていうのにさ。わたしだってお礼がしたいわよ。」

「どんなお礼だ。」

「だから、まアお這入んなさい。」

雷の音は少し遠くなつたが、雨は却て礫を打つように一層激しく降りそそいで来た。軒先に掛けた日蔽の下に居ても跳上る飛沫の烈しさに、わたくしはとやかく言う暇もなく内へ這入つた。

荒い大阪格子を立てた中仕切へ、鈴のついたりボンの簾が下げてある。其下の上框に腰をかけて靴を脱ぐ中に女は雑巾で足をふき、端折つた裾もおろさず下座敷の電燈をひねり、

「誰もいないから、お上んなさい。」

「お前一人か。」

「ええ。昨夜まで、もう一人居たのよ。住替に行つたのよ。」

「お前さんが御主人かい。」

「いいえ。御主人は別の家よ。玉の井館ツて云う寄席があるでしょう。その裏に住宅があるのよ。每晚十二時になると帳面を見にくるわ。」

「じゃアのん気だね。」わたくしはすすめられるがまま長火鉢の側に坐り、立膝して茶

を入れる女の様子を見やつた。

年は二十四五にはなつてゐるであらう。なかなかいい容貌きりようである。鼻筋の通つた円顔は白粉焼おしろいやけがしてゐるが、結立ゆいたての島田の生際はえぎわもまだ抜上ぬけあがつてはいない。黒目勝の眼の中も曇つていず唇や齒ぐきの血色を見ても、其健康はまださして破壊されても居ないよ
うに思われた。

「この辺は井戸か水道か。」とわたくしは茶を飲む前に何気なく尋ねた。井戸の水だと答えたら、茶は飲む振りをして置く用意である。

わたくしは花柳病よりも寧むしろチブスのような伝染病を恐れている。肉体的よりも夙はやから精神的廢人になつたわたくしの身には、花柳病の如き病勢の緩慢なものは、老後の今日、さして気にはならない。

「顔でも洗うの。水道なら其処そこにあるわ。」と女の調子は極めて気軽である。

「うむ。後でいい。」

「上着だけおぬぎなさい。ほんとに随分濡れたわね。」

「ひどく降つてるな。」

「わたし雷さまより光るのがいやなの。これじゃお湯にも行けやしない。あなた。まだい

いでしよう。わたし顔だけ洗って御化粧おしまいしてしまふから。」

女は口をゆがめて、懐紙ふところがみで生際の油をふきながら、中仕切の外の壁に取りつけた洗面器の前に立った。リボンの簾越しに、両肌もろはだをぬぎ、折りがんで顔を洗う姿が見える。肌は顔よりもずっと色が白く、乳房の形で、まだ子供を持った事はないらしい。

「何だか檀那になったようだな。こうしていると。箆筒たんすはあるし、茶棚はあるし……。」

「あけて御覧なさい。お芋か何かある筈よ。」

「よく片づいているな。感心だ。火鉢の中なんぞ。」

「毎朝、掃除だけはちゃんとしますもの。わたし、こんな処にいるけれど、世帯持は上手なのよ。」

「長くいるのかい。」

「まだ一年と、ちよつと……。」

「この土地が初めてじやないんだらう。芸者でもしていたのかい。」

汲みかえる水の音に、わたくしの言うことが聞えなかつたのか、又は聞えない振りをしたのか、女は何とも答えず、肌ぬぎのまま、鏡台の前に坐り毛筋棒けすきで鬢びんを上げ、肩の方から白粉をつけ初める。

「どこに出でいたんだ。こればかりは隠せるものじゃない。」

「そう……でも東京じゃないわ。」

「東京のいまわりか。」

「いいえ。ずつと遠く……。」

「じゃ、満洲……。」

「宇都の宮にいたの。着物もみんなその時分だよ。これで沢山だわねえ。」と言いながら立上つて、衣紋竹えもんだけに掛けた裾模様ひとえの単衣物ひとえに着かえ、赤い弁慶縞だてじめの伊達締だてじめを大きく前で結ぶ様子は、少し大き過ぎる潰島田の銀糸とつりあつて、わたくしの目にはどうやら明治年間の娼妓のように見えた。女は衣紋を直しながらわたくしの側に坐り、茶ぶ台の上からバツトを取り、

「縁起だから御祝儀しゅうぎだけつけて下さいね。」と火をつけた一本を差出す。

わたくしは此の土地の遊び方をまんざら知らないのでもなかつたので、

「五十銭だね。おぶ代だは。」

「ええ。それはおきまりの御規則通りだわ。」と笑いながら出した手の平を引込まさず、そのまま差伸している。

「じゃ、一時間ときめよう。」

「すみませんね。ほんとうに。」

「その代り。」と差出した手を取って引寄せ、耳元に囁くと、

「知らないわよ。」と女は目を見張って睨返し、「馬鹿。」と言いさまわたくしの肩を撲つた。

為永春水の小説を読んだ人は、作者が叙事のところどころに自家弁護の文を挿んで、いることを知っているであろう。初恋の娘が恥しさを忘れて思う男に寄添うような情景を書いた時には、その後で、読者はこの娘がこの場合の様子や言葉使のみを見て、淫奔娘だと断定してはならない。深窓の女も意中を打明ける場合には芸者も及ばぬ艶しい様子になることがある。また、既に里馴れた遊女が偶然幼馴染の男にめぐり会うところを写した時には、商売人でも斯う云う時には娘のようにもじするもので、これはこの道の経験に富んだ人達の皆承知しているところ、作者の観察の至らないわけではないのだから、そのつもりでお読みなさいと云うような事が書添えられている。

わたくしは春水に倣つて、ここに剩語を加える。読者は初めて路傍で逢つた此女が、

わたくしを遇する態度の馴々し過るのを怪しむかも知れない。然しこれは実地の遭遇を潤色せずに、そのまま記述したのに過ぎない。何の作意も無いのである。驟雨雷鳴から事件の起つたのを見て、これまた作者常套の筆法だと笑う人もあるだろうが、わたくしは之を慮るがために、わざわざ事を他に設けることを欲しない。夕立が手引をした此夜の出来事が、全く伝統的に、お誂通りであつたのを、わたくしは却て面白く思い、実はそれが書いて見たいために、この一篇に筆を執り初めたわけである。

一体、この盛場の女は七八百人と数えられているそうであるが、その中に、島田や丸鬚に結っているものは、十人に一人くらい。大体は女給まがいの日本風と、ダンサー好みの洋装とである。雨宿をした家の女が極く少数の旧風に属していた事も、どうやら陳腐の筆法に適當しているような心持がして、わたくしは事実の描写を傷けるに忍びなかつた。雨は歇まない。

初め家へ上つた時には、少し声を高くしなれば話が聞きとれない程の降り方であつたが、今では戸口へ吹きつける風の音も雷の響も歇んで、亜鉛葺の屋根を撲つ雨の音と、雨だれの落ちる声ばかりになつている。路地には久しく人の声も聲音も途絶えていたが、突然、

「アラアラ大変だ。きいちゃん。どしやう鱒が泳いでるよ。」という黄いろい声につれて下駄の音がしだした。

女はつと立ってリボンの間から土間の方を覗き、のぞ「家は大丈夫だ。溝があふれると、此方まで水が流れてくるんですよ。」

「少しは小降りになったようだな。」

「宵の口に降るとお天気になつても駄目なのよ。だから、ゆつくりしていらつしやい。わたし、今の中に御飯たべてしまふから。」

女は茶棚の中からたくあんづけ沢庵漬を山盛りにした小皿と、茶漬茶碗と、それからアルミの小鍋を出して、ちよつとふた鳥渡蓋をあけて匂をかぎ、長火鉢の上に載せるのを、何かと見ればさつまいも薩摩芋の煮たのである。

「忘れていた。いいものがある。」とわたくしは京橋で乗換の電車を待っていた時、浅草海苔を買ったことを思い出して、それを出した。

「奥さんのお土産。」

「おれは一人なんだよ。食べるものは自分で買わなければ。」

「アパートで彼女と御一緒。ほほほほ。」

「それなら、今時分うろついちやア居られない。雨でも雷でも、かまわず帰るさ。」

「そうねえ。」と女はいかにも尤もつともだと云うような顔をして暖くなりかけたお鍋の蓋を取り、

「一緒にどうぞ。」

「もう食べて来た。」

「じゃア、あなたは向むこうをむいていらつしやい。」

「御飯は自分で炊くのかい。」

「住宅すまいの方から、お昼と夜の十二時に持つて来てくれるのよ。」

「お茶を入れ直そうかね。お湯がぬるい。」

「あら。はばかりさま。ねえ。あなた。話をしながら御飯をたべるのは楽しみなものね。」

「一人ツきりの、すつぽり飯はいやだな。」

「全くよ。じゃア、ほんとお一人。かわいそうねえ。」

「察しておくれだろう。」

「いいの、さがして上げるわ。」

女は茶漬を二杯ばかり。何やらはしやいだ調子で、ちやらちやらと茶碗の中で箸をゆすぎ、さも急いそがしそうに皿小鉢を手早く茶棚にしまいながらも、顎おとがを動して込上げる沢庵漬の

おくびを押えつけている。

戸外そとには人の足音と共に「ちよいとちよいと」と呼ぶ声が聞え出した。

「歌んだようだ。また近い中に出て来よう。」

「きつと入いらつしやいね。昼間でも居ます。」

女はわたくしが上着をきかけるのを見て、後へ廻り襟えりを折返しながら肩越しに頬を摺すり付りつけて、「きつとよ。」

「何て云う家うちだ。ここは。」

「今、名刺あげるわ。」

靴をはいている間あいだに、女は小窓の下に置いた物の中から三味線のバチの形に切った名刺を出してくれた。見ると寺島町七丁目六十一番地（二部）安藤まさ方雪子。

「さよなら。」

「まっすぐにお帰んなさい。」

四

小説「失踪」の一節

吾妻橋のまん中ごろと覚しい欄干に身を倚せ、種田順平は松屋の時計を眺めては来かか
る人影に気をつけている。女給のすみ子が店をしまつてからわざわざ廻り道をして来るの
を待まちあわ合あしているのである。

橋の上には円タクの外電車ほかもバスももう通つていながつたが、二三日前から俄にわかの暑さに、
シャツ一枚で涼んでいるものもあり、包をかかえて帰りをいそぐ女給らしい女の行き来も
まだ途絶えずにいる。種田は今夜すみ子の泊つているアパートに行き、それからゆつくり
行末の目当を定めるつもりなので、行つた先で、女がどうなるものやら、そんな事は更に
考えもせず、又考える余裕もない。唯今こんにち日まで二十年の間家族のために一生を犠牲にし
てしまった事が、いかにもにがしく、腹が立つてならないのであつた。

「お待ちどうさま。」思つたより早くすみ子は小走りにかけて来た。「いつでも、駒形こまがた
橋ばしをわたつて行くんですよ。だけれど、兼子さんと一緒だから。あの子、口がうるさい
からね。」

「もう電車はなくなつたようだぜ。」

「歩いたつて、停留場三つぐらいだわ。その辺から円タクに乗りましょう。」

「明いた部屋があればいいが。」

「無かつたら今夜一晩ぐらい、わたしのところへお泊んなさい。」

「いいのか、大丈夫か。」

「何がさ。」

「いつか新聞に出ていたじゃないか。アパートでつかまった話が……。」

「場所によるんだわ。きつと。わたしの処なんか自由なもんよ。お隣も向側もみんな女給さんかお妾さんめかけよ。お隣りなんか、いろいろな人が来るらしいわ。」

橋を渡り終らぬ中に流しの円タクが秋葉神社の前まで三十銭で行く事を承知した。

「すつかり変つてしまつたな。電車はどこまで行くんだ。」

「向嶋の終点。秋葉さまの前よ。バスなら真直に玉の井まで行くわ。」

「玉の井——こんな方角だつたかね。」

「御存じ。」

「たつた一度見物に行った。五六年前だ。」

「賑にぎやかよ。毎晩夜店が出るし、原っぱに見世物もかかるわ。」

「そうか。」

種田は通^{とおりすぎ}過る道の両側を眺めている中、自動車は早くも秋葉神社の前に来た。すみ子は戸の引手を動しながら、

「ここでもいいわ。はい。」と賃金をわたし、「そこから曲りましょう。あつちは交番があるから。」

神社の石垣について曲ると片側は花柳界の灯^{あかり}がつづいて横町の突当り。俄に暗い空地の一隅に、吾妻アパートという灯が、セメント造りの四角な家の前面を照している。すみ子は引戸をあけて内^{なか}に入り、室の番号をしるした下駄箱に草履をしまうので、種田も同じように履物を取り上げると、

「二階へ持つて行きます。目につくから。」とすみ子は自分のスリッパを男にはかせ、その下駄を手にかけて正面の階段を先に立つて上る。

外側の壁や窓は西洋風に見えるが、内^{なか}は柱の細い日本造りで、ぎしぎし音のする階段を上りきった廊下の角に炊事場があつて、シユミイズ一枚の女が、断髪を振乱したまま薬^{やかん}罐に湯をわかしていた。

「今晚。」とすみ子は軽く挨拶をして右側のはずれから二番目の扉^{かぎ}を鍵^{かぎ}であけた。

畳のよごれた六畳ほどの部屋で、一方は押入、一方の壁際には箆^{たんす}筥、他の壁には浴衣^{ゆかた}や

ボイルの寝間着がぶら下げてある。すみ子は窓を明けて、「ここが涼しいわ。」と腰巻や足袋たびの下つている窓の下に座布団を敷いた。

「一人でこうしていれば全く気楽だな。結婚なんか全く馬鹿らしくなるわけだな。」

「家うちではしよつちゆう帰つて来いッて云うのよ。だけれど、もう駄目ねえ。」

「僕ももう少し早く覚かくせい醒せいすればよかつたのだ。今じゃもう晚おそい。」と種田は腰巻の干しである窓越しに空の方を眺めたが、思出したように、「明間あきまがあるか、きいてくれないか。」

すみ子は茶を入れるつもりと見えて、湯わかしを持ち、廊下へ出て何やら女同士で話をしていたが、すぐ戻つて来て、

「向むこうの突当りが明いているそうです。だけれど今夜は事務所のおばさんが居ないんですとや。」

「じゃ、借りるわけには行かないな。今夜は。」

「一晩や二晩、ここでもいいじゃないの。あんたさえ構わなければ。」

「おれはいいが。あんたはどうする。」と種田は眼を円くした。

「わたし。此処ここに寝るわ。お隣りの君ちゃんのところへ行つてもいいのよ。彼氏が来ていな

ければ。」

「あなたの処とこは誰も来ないのか。」

「ええ。今のところ。だから構わないのよ。だけれど、先生を誘惑してもわるいでしょう。」

種田は笑いたいような、情ないような一種妙な顔をしたまま何とも言わない。

「立派な奥さんもお嬢さんもいらつしやるんだし……。」

「いや、あんなもの。晩おそ時まきでもこれから新生涯に入るんだ。」

「別居なさるの。」

「うむ。別居。むしろ離別さ。」

「だって、そうはいかないでしょう。なかなか。」

「だから、考えているんだ。乱暴でも何でもかまわない。一時姿を晦くらすんだな。そうすれば決裂の糸口がつくだろうと思うんだ。すみ子さん。明部屋のはなしが付かなければ、迷惑をかけても済まないから、僕は今夜だけ何処どこかで泊ろう。玉の井でも見物しよう。」

「先生。わたしもお話したいことがあるのよ。どうしようかと思って困ってる事があるのよ。今夜は寝ないで話をして下さらない。」

「この頃はじき夜があけるからね。」

「このあいだ横浜までドライブしたら、帰り道には明るくなったわ。」

「あんたの身上話は、初めツから聞いたら、女中で僕の家へ来るまでも大変なものだろう。それから女給になってから、まだ先があるんだからな。」

「一晩じゃ足りないかも知れないわね。」

「全く……ははははは。」

ひとしきりしん

「一時 寂としていた二階のどこやらから、男女の話し声が聞え出した。炊事場では又しても水の音がしている。すみ子は真実夜通し話をするつもりと見えて、帯だけ解いて丁寧に畳み、足袋を其上に載せて押入にしまい、それから茶ぶ台の上を拭直して茶を入れながら、」

「わたしのこうなった訳、先生は何だと思つて。」

「さア、やつぱり都会のあこがれだと思ふんだが、そうじゃないのか。」

「それも無論そうだけれど、それよりか、わたし父の商売が、とてもいやだったの。」

「何だね。」

「親分とか 俠客とかいうんでしょう。とにかく暴力団……。」とすみ子は声を低くし

た。

五

梅雨つゆがあけて暑中になると、近鄰の家の戸障子が一斉に明け放されるせいでもあるか、他の時節には聞えなかつた物音が俄に耳立つてきこえて来る。物音の中で最もわたくしを苦しめるものは、板塀いたべい一枚を隔てた鄰家のラデオである。

夕方少し涼しくなるのを待ち、燈下の机に向おうとすると、丁度その頃から亀裂ひびの入つたような鋭い物音が湧起わきおこつて、九時過ぎてからでなくては歇まない。此の物音の中でも、殊はなはだに甚しくわたくしを苦しめるものは九州弁の政談、浪花節なにわぶし、それから学生の演劇に類似した朗読に洋楽を取り交ぜたものである。ラデオばかりでは物足らないと見えて、昼夜時間をかまわず蓄音機で流行唄はやりうたを鳴し立てる家もある。ラデオの物音を避けるために、わたくしは毎年夏になると夕飯ゆうめしもそこそこに、或時は夕飯も外で食うように、六時を合図にして家を出ることにしている。ラデオは家を出れば聞えないというわけではない。道端の人家や商店からは一段烈しい響が放たれているのであるが、電車や自動車の響

と混濁こんとうして、市街一般の騒音となつて聞えるので、書齋に孤坐している時にくらべると、歩いてゐる時の方が却て気にならず、余程楽である。

「失踪」の草稿は梅雨があげると共にラデオに妨げられ、中絶してからもう十日あまりになつた。どうやら其そのまま感興も消え失せてしまひそうである。

今年の夏も、昨年また一昨年と同じように、毎日まだ日の没しない中うちから家を出るが、実は行くべきところ、歩むべきところが無い。神代帚葉翁こうじろそうようおうが生きていた頃には毎夜欠

かさぬ銀座の夜涼みも、一夜いちやごとに興味の加くわるほどであつたのが、其人も既に世を去り、

街頭の夜色にも、わたくしはもう飽果あきはてたような心持になつてゐる。之に加えて、其後銀

座通にはうっかり行かれないような事が起つた。それは震災ぜん前新橋の芸者家ふうていに出入して

たと云う車夫が今は一見して人殺しでもしたことのありそうな、人相ふうていと風体の悪い破ならず

落戸ものになつて、折節おりふし尾張町辺を徘徊はいかいし、むかし見覚えのあるお客の通るのを見ると

無心難題を言いかける事である。

最初はしめ黒沢商店の角で五拾錢銀貨を恵んだのが却て悪い例となり、恵まれぬ時は悪声を放つので、人だかりのするのが厭いやさにまた五拾錢やるようになってしまふ。此男に酒手さかての無心をされるのはわたくしばかりではあるまいと思つて、或晩欺いて四辻の派出所へ連れて

行くと、立番の巡查とはとうに馴染になつていて、巡查は面倒臭さに取り合つてくれる様子をも見せなかつた。出雲町……イヤ七丁目の交番でも、或日巡查と笑いながら話をしているのを見た。巡查の眼にはわたくしなどより此男の方が却て素性が知れているのかも知れない。

わたくしは散策の方面を隅田河の東に替え、溝際どいぎわの家に住んでいるお雪という女をたずねて憩やすむことにした。

四五日つづけて同じ道を往復すると、麻布あさぶからの遠道も初めに比べると、だんだん苦にならないようになる。京橋と雷門かみなりもんとの乗替も、習慣になると意識よりも身体からだの方が先に動いてくれるので、さほど煩わづらしいとも思わないようになる。乗客の雑沓ざつとする時間や線路が、日によつて違うことも明あきになるので、之を避けさえすれば、遠道だけにゆつくり本を読みながら行くことも出来るようになる。

電車なの内での読書は、大正九年の頃老眼鏡を掛けるようになってから全く廃せられていたが、雷門までの遠道を往復するようになって再び之を行うことにした。然し新聞も雑誌も新刊書も、手にする習慣がないので、わたくしは初めての出掛けには、手に触れるがまま依田よた学海がくかいの墨水二十四景を携えて行つた。

長堤蜿蜒。經三匝祠稍成彎狀。至長命寺。一折為桜樹最多処。寛永中徳川大猷公放鷹於此。会腹痛。飲寺井而癒。曰。是長命水也。因名其井。並及寺号。後有芭蕉居士賞雪佳句。繪炙人口。嗚呼公絶代豪傑。其名震世。宜矣。居士不過一布衣。同伝於後。蓋人在所樹立何如耳。

先儒の文は目前の景に対して幾分の興を添えるだろうと思つたからである。

わたくしは三日目ぐらいには散歩の途すがら食料品を買わねばならない。わたくしは其ついでに、女に贈る土産物をも買った。此事が往訪すること僅に四五回にして、二重の効果を収めた。

いつも罐詰ばかり買うのみならず、シャツや上着もボタンの取れたのを着ているのを見て、女はいよいよわたくしをアパート住いの独ひとりもの者と推定したのである。独身ならば毎夜のように遊びに行つても一向不審はないと云う事になる。ラデイオのために家に居られないと思う筈もなからうし、又芝居や活動を見ないので、時間を空費するところがない。行く処がないので来る人だとも思う筈がない。この事は言訳をせずとも自然にうまく行つたが、金の出処でとしろについて疑いをかけられはせぬかと、場所柄だけに、わたくしはそれとなく質問した。すると女は其晩払うものさえ払つてくれれば、他の事ほかはてんで考えてもい

ないと云う様子で、

「こんな処とこでも、遣つかう人は随分遣つかうわよ。まる一ト月居続つけしたお客があつたわ。」

「へえ。」とわたくしは驚おどろき、「警察へ届けなくつてもいいのか。吉原なんかだとじき届とどけると云う話じやないか。」

「この土地でも、家うちによつちやアするかも知れないわ。」

「居続つけしたお客は何だつた。泥棒か。」

「呉服屋さんだつたわ。とうとう店の檀那だんなが来て連れて行つたわ。」

「勘定の持逃げだね。」

「そうでしょう。」

「おれは大丈夫だよ。其方そのほうは。」と言つたが、女はどちらでも構かまわなないという顔をして聞返きかへしもしなかつた。

然しわたくしの職業については、女の方ではとうから勝手に取りきめていいるらしい事がわかつて来た。

二階の襖ふすまに半紙四ツ切程の大きさに複製した浮世絵の美人画が張交はりまぜにしてある。その中には歌麻呂の鮑取あわびり、豊信とよのぶの入浴美女など、曾かつてわたくしが雑誌此花このはなの挿絵さしえで見覚

えているものもあつた。北齋の三冊本、福徳和合人の中から、男の姿を取り去り、女の方ばかりを残したのもあつたので、わたくしは委しくこの書の説明をした。それから又、お雪がお客と共に二階へ上つている間、わたくしは下の一ト間で手帳へ何か書いていたのを、ちらと見て、てつきり秘密の出版を業とする男だと思つたらしく、こんど来る時そういう本を一冊持つて来てくれと言出した。

家には二三十年前に集めたものの残りがあつたので、請われるまま三四冊一度に持つて行つた。ここに至つて、わたくしの職業は言わず語らず、それと決められたのみならず、悪銭の出処もおのずから明瞭になつたらしい。すると女の態度は一層打解けて、全く客扱いをしないようになった。

日蔭に住む女達が世を忍ぶ後暗い男に對する時、恐れもせず嫌いもせず、必ず親密と愛憐との心を起す事は、夥多の実例に徴して深く説明するにも及ぶまい。鴨川の芸妓は幕吏に追われる志士を救い、寒駅の酌婦は関所破りの博徒に旅費を恵むことを辞さなかつた。トスカは逃竄の貧士に食を与え、三千歳は無頼漢に恋愛の真情を捧げて悔いなかつた。此に於てわたくしの憂慮するところは、この町の附近、若しくは東武電車の中などで、文学者と新聞記者とに出会わぬようにする事だけである。この他の人達には何処で会おう

と、後をつけられようと、一向に差さ問もんはない。謹厳な人達からは年少の頃から見限られた身である。親類の子供もわたくしの家には寄りつかないようになっていいるから、今では結局憚はばるものはない。ただ独恐ひとりる可べきは操觚そうこの士である。十余年前銀座の表通しきりにカフエーが出来はじめた頃、此に酔を買った事から、新聞と云う新聞は挙こつてわたくしを筆ひ誅ちゆうした。昭和四年の四月「文藝春秋」という雑誌は、世に「生存せいぞさせて置いてはならない」人間としてわたくしを攻撃した。其文中には「処女誘拐」というが如き文字をも使使用した所を見るとわたくしを陥れて犯法の罪人たらしめようとしたものかも知れない。彼等等はわたくしが夜竊ひそかに墨水をわたつて東に遊ぶ事を探知したなら、更に何事を企図するか測はかりがたい。これ真に恐る可べきである。

毎夜電車の乗降りのみならず、この里へ入込んでからも、夜店の賑にぎわう表通は言うまでもない。路地の小径こみちも人の多い時には、前後左右に気を配って歩かなければならない。この心持は「失踪しつそう」の主人公種田順平が世をしのぶ境遇を描写するには必ひつ須しゆの実験である。

六

わたくしの忍んで通う溝とびざわ際ぎわの家が寺島町七丁目六十何番地に在ることは既に識しるした。
 この番地のあたりはこの盛場では西北の隅すみに寄つたところで、目貫めぬきの場所ではない。仮に
 之を北里きたに警たえて見たら、京町一丁目も西河岸がしに近いはずれとでも言うべきものであろう。
 聞いたばかりの話だから、鳥渡ちよつとつう通めかして此盛場の沿革を述べようか。大正七八年の頃、
 浅草観音堂裏手の境内が狭せまめられ、広い道路が開かれるに際して、むかしから其辺に櫛しつ比び
 していた楊弓場ようきゆうば銘酒屋のたぐいが悉ことごとく取払いを命ぜられ、現在いまでも京成バスの往復して
 いる大正道路の両側に処定めず店を移した。つづいて伝法院の横手や江川えがわ玉乗りの裏あた
 りからも追われて来るものが引きも切らず、大正道路は殆ほとんど並銘酒屋になつてしまい、通
 行人は白昼てででも袖を引かれ帽子を奪われるようになったので、警察署の取締りが厳しくな
 り、車の通る表通から路地の内へと引込ませられた。浅草の旧地では凌雲閣りょううんかくの裏手か
 ら公園の北側千束町の路地に在つたものが、手を尽して居残りの策を講じていたが、それ
 も大正十二年の震災のために中絶し、一時悉くこの方面へ逃げて来た。市街再建の後西にしけ
 見番んぼんと称する芸者家組合をつくり転業したのもあつたが、この土地の繁栄はますます
 盛になり遂に今日の如き半ば永久的な状況を呈するに至つた。初め市中との交通は白髻しらひげ

橋はしの方面一筋だけであつたので、去年京成電車が運転を廃止する頃までは其停留場に近
いところが一番賑にぎやかであつた。

然るに昭和五年の春都市復興祭の執行せられた頃、吾妻橋から寺島町に至る一直線の道
路が開かれ、市内電車は秋葉神社前まで、市営バスの往復は更に延長して寺島町七丁目の
はずれに車庫を設けるようになった。それと共に東武鉄道会社が盛場の西南に玉の井駅を
設け、夜も十二時まで雷門から六銭で人を載せて来るに及び、町の形勢は裏と表と、全く
一変するようになった。今まで一番わかりにくかつた路地が、一番入り易くなつた代り、
以前目貫といわれた処が、今では端はすれになつたのであるがそれでも銀行、郵便局、湯屋、
寄席よせ、活動写真館、玉の井稲荷いなりの如きは、いずれも以前のままだ正道路に残つていて、俚り
俗広小路ぞく、又は改正道路と呼ばれる新しい道には、円タクの輻ふく湊そうと、夜店の賑いとを見
るばかりで、巡查の派出所も共同便所もない。このような辺鄙へんびな新開町に在つてすら、時
勢に伴う盛衰の変は免れないのであつた。況いや人の一生に於いてをや。

わたくしがふと心易くなつた溝際の家……お雪という女の住む家が、この土地では大正
開拓期の盛時を想おも起おこさせる一隅に在つたのも、わたくしの如き時運に取り残された身

には、何やら深い因縁があつたように思われる。其家は大正道路から唯ある路地に入り、汚れた幟のぼりの立つている伏見稻荷の前を過ぎ、溝に沿うて、猶奥深く入り込んだ処に在るので、表通のラデイオや蓄音機の響も素見客ひやかしの足音に消されてよくは聞えない。夏の夜、わたくしがラデイオのひびきを避けるにはこれほど適した安息処は他にはあるまい。

一体この盛場では、組合の規則で女が窓に坐る午後四時から蓄音機やラデイオを禁じ、また三味線をも弾かせないと云う事で。雨のしとしとと降る晩など、ふけるにつれて、ちよいとちよいとの声も途絶えがちになると、家の内外うちそとむらがに群り鳴く蚊の聲が耳立って、いかにも場末の裏町らしい侘わびしさが感じられて来る。それも昭和現代の陋巷ろうこうではなくして、鶴屋南北の狂言などから感じられる過去の世の裏淋しい情味である。

いつも島田か丸まるまげ鬚ひげにしか結っていないお雪の姿と、溝の汚さと、蚊の鳴なくこえ声とはわたくしの感覚を著しく刺戟しげきし、三四年むかしに消え去った過去の幻影を再現させてくれるのである。わたくしはこのはかなくも怪し気なる幻影の紹介者に対して出来得ることならあからさまに感謝の言葉を述べたい。お雪さんは南北の狂言を演じる俳優らんちよよりも、蘭らんちよを語る鶴賀つがなにかしよりも、過去を呼返す力に於ては一層巧妙なる無言の芸術家であつた。

わたくしはお雪さんが飯櫃を抱きかかえるようにして飯をよそい、さらさら音を立てて茶漬を掻込む姿を、あまり明くない電燈の光と、絶えざる溝蚊の声の中にじつと眺めやる時、青春のころ狎れしんだ女達の姿やその住居のさまをありありと目の前に思浮べる。わたくしのものばかりでない。友達の女の事までが思出されて来るのである。そのころには男を「彼氏」といい、女を「彼女」とよび、二人の侘住居を「愛の巣」などと云う言葉はまだ作り出されていなかった。馴染の女は「君」でも、「あんた」でもなく、ただ「お前」といえばよかった。亭主は女房を「おツかア」女房は亭主を「ちゃん」と呼ぶものもあつた。

溝の蚊の唸る声は今日に在つても隅田川を東に渡って行けば、どうやら三十年前のむかしと変りなく、場末の町のわびしさを歌っているのに、東京の言葉はこの十年の間に変れば実に変つたものである。

そのあたり片つけて吊る蚊帳哉
さらぬだに暑くるしきを木綿蚊帳

家は秋の西日や溝のふち

わび住みや団扇も折れて秋暑し

蚊帳の穴むすびむすびて九月哉

屑籠の中から出て鳴く蚊かな

残る蚊をかぞへる壁や雨のしみ

この蚊帳も酒とやならむ暮の秋

これはお雪が住む家の茶の間に、或夜蚊帳が吊つてあつたのを見て、ふと思出した旧作の句である。半は亡友唾々君が深川長慶寺裏の長屋に親の許さぬ恋人と隠れ住んでいたのを、其折々尋ねて行つた時よんだもので、明治四十四年のころであつたろう。

その夜お雪さんは急に齒が痛くなつて、今しがた窓際から引込んで寝たばかりのところだと言いながら蚊帳から這い出したが、坐る場処がないので、わたくしと並んで上^{あがり}がま^まち^ちへ腰をかけた。

「いつもより晚いじやないのさ。あんまり、待たせるもんじやないよ。」

女の言葉遣いはその態度と共に、わたくしの商売が世間を憚るものと推定せられてから、狎昵の境を越えて寧放濫に走る嫌いがあつた。

「それはすまなかつた。虫歯か。」

「急に痛くなつたの。目がまわりそうだったわ。腫れてるだろう。」と横顔を見せ、「あなた。留守番していて下さいな。わたし今の中歯医者へ行つて来るから。」

「この近処か。」

「検査場のすぐ手前よ。」

「それじゃ公設市場の方だろう。」

「あなた。方々歩くと見えて、よく知ってるんだねえ。浮気者。」

「痛い。そう邪慳にするもんじやない。出世前の身体だよ。」

「じゃ頼むわよ。あんまり待たせるようだったら帰つて来るわ。」

「お前待ち待ち蚊帳の外……と云うわけか。仕様がなない。」

わたくしは女の言葉遣いがぞんざいになるに従つて、それに適応した調子を取るようになってゐる。これは身分を隠そうが為の手段ではない。処と人とを問わず、わたくしは現代の人と応接する時には、あたかも外国に行つて外国語を操るやうに、相手と同じ言葉を遣う事にしてゐるからである。「おらが国」と向の人が言つたら此方も「おら」を「わたくし」の代りに使う。説話は少し余事にわたるが、現代人と交際する時、口語を学ぶことは

容易であるが文書の往復になると頗すこぶ困難を感じる。殊に女の手紙に返書を裁する時「わたし」を「あたし」となし、「けれども」を「けど」となし、又何事につけても、「必然性」だの「重大性」だのと、性の字をつけて見るのも、冗談半分口先で真似をしている時とはちがつて、之を筆にする段になると、実に堪難い嫌悪けんおの情を感じなければならぬ。恋しきは何事につけても還らぬむかしで、あたかもその日、わたくしは虫干をしていた物の中に、柳やなぎ橋はしの妓にして、向嶋小梅の里に囲われていた女の古い手紙を見た。手紙には必ずそつろうぶん候文を用いなければならなかった時代なので、その頃の女は、硯すずりを引寄せ筆を乗とれば、文字を知らなくとも、おのずから候可こ候の調子を思出したものらしい。わたくしは人の嗤ししやう笑を顧あやみず、これをここに録ろくしたい。

一筆ふで申上まいらせ候。その後は御ぶさた致し候て、何とも申わけ無これなく之御免下されたく候。私事これまでの住居すまい誠に手ぜまに付この中右じゆうのところへしき移り候まま御おん知らせ申上候。まことにまことに申上かね候え共、少々お目もじの上申上たき事御おんざ候間、何なにと卒御都合なし下されて、あなた様のよろしき折御立より下されたく幾重にも御待申上候。一日も早く御越しのほど、先ますは御めもじの上にてあらあらかしく。 ○○より

竹屋の渡しの下にみやこ湯と申す湯屋あり。八百屋でお聞下さい。天氣がよろしく候故御都合にて唾々さんもお誘い合され堀切へ参りたくと存候間御する前からいかがに候や。御たずね申上候。尤この御返事御無用にて候。

文中「ひき移り」を「しき移り」となし、「ひる前」を「しる前」に書き誤っているのは東京下町言葉の訛りである。竹屋の渡しも今は枕橋の渡と共に廃せられて其跡もない。我青春の名残を弔うに今は之を那辺に探るべきか。

七

わたくしはお雪の出で行った後、半おろした古蚊帳の裾に坐つて、一人蚊を追いながら、時には長火鉢に埋めた炭火と湯わかしとに氣をつけた。いかに暑さの烈しい晩でも、この土地では、お客の上った合図に下から茶を持って行く習慣なので、どの家でも火と湯とを絶した事がない。

「おい。おい。」と小声に呼んで窓を叩くものがある。

わたくしは大方馴染の客であろうと思ひ、出ようか出まいかと、様子を窺つてみると、外の男は窓口から手を差入れ、猿をはずして扉をあけて内へ入つた。白っぽい浴衣に兵児帯をしめ、田舎臭い円顔に口髯を生した年は五十ばかり。手には風呂敷に包んだものを持つてゐる。わたくしは其様子と其顔立とで、直様お雪の抱主だろうと推察したので、向から言うのを待たず、

「お雪さんは何だか、お医者へ行くつて、今おもてで逢いました。」

抱主らしい男は既にその事を知つていたらしく、「もう帰るでしょう。待つていなさい。」と云つて、わたくしの居たのを怪しむ風もなく、風呂敷包を解いて、アルミの小鍋を出し茶棚の中へ入れた。夜食の惣菜を持って来たのを見れば、抱主に相違はない。

「お雪さんは、いつも忙しくつて結構ですなえ。」

わたくしは挨拶のかわりに何かお世辞を言わなければならぬと思つて、そう言つた。「何ですか。どうも。」と抱主の方でも返事に困ると云つたような、意味のない事を言つて、火鉢の火や湯の加減を見るばかり。面と向つてわたくしの顔さえ見ない。寧ろ対談を避けるというように横を向いてゐるので、わたくしも其まま黙つていた。

こういう家の亭主と遊客との対面は、両方とも甚気はなはだまずいものである。貸座敷、待合茶屋、芸者家などの亭主と客との間もまた同じことで、此両者の対談する場合は、必ず女を中心にして甚気まずい紛擾ごたごたの起つた時で、然らざる限り対談の必要が全くないからでもあろう。

いつもお雪が店口で焚く蚊遣香かやりこうも、今夜は一度もともされなかつたと見え、家いえ中じゆうにわめく蚊の群は顔を刺すのみならず、口の中へも飛込もうとするのに、土地馴れている筈の主人も、暫く坐つている中我慢がしきれなくなつて、中仕切の敷居際に置いた扇風機の引手を捻ねじつたが破こわれていると見えて廻らない。火鉢の抽斗ひきだしから漸く蚊遣香の破片かけらを見出した時、二人は思わず安心したように顔を見合せたので、わたくしは之を機会に、

「今年はどこもひどい蚊ですよ。暑さも格別ですがね。」と言うと、

「そうですね。ここはもともと埋地うみちで、碌ろくに地揚じあげもしないんだから。」と主人もしぶしぶ口をきき初めた。

「それでも道がよくなりましたね。第一便利になりましたね。」

「その代り、何かにつけて規則がやかましくなった。」

「そう。二三年前にや、通ると帽子なんぞ持つて行ったものですね。」

「あれにや、わたし達この中の者も困ったんだよ。用があっても通れないからね。女達にそう言つても、そう一々見張りをしても居られないし、仕方がないから罰金を取るようにしたんだ。店の外へ出てお客をつかまえる処を見つかりと四十二円の罰金だ。それから公園あたりへ客引を出すのも規則違反にしたんだ。」

「それも罰金ですか。」

「うむ。」

「それは幾何いくばですか。」

遠廻しに土地の事情を聞出そうと思つた時、「安藤さん」と男の声で、何やら紙片かみきれを窓に差入れて行つた者がある。同時にお雪が帰つて来て、その紙を取上げ、猫板の上に置いたのを、偷見ぬすみみすると、瞻写摺とうしゃずりにした強盗犯人搜索の回状である。

お雪はそんなものには目も触れず、「お父さん、あした抜かなくっちゃいけないって云うのよ。この齒。」と言つて、主人の方へ開いた口あを向ける。

「じゃア、今夜は食べる物はいらなかつたな。」と主人は立ちかけたが、わたくしはわざと見えるように金を出してお雪にわたし、一人先へ立つて二階に上つた。

二階は窓のある三畳の間に茶ぶ台を置き、次が六畳と四畳半位の二間しかない。一体こ

の家はもと一軒であつたのを、表と裏と二軒に仕切つたらしく、下は茶の間の一室きりで台所も裏口もなく、二階は梯子はしごの降おり口くちからつづいて四畳半の壁も紙を張つた薄い板一枚なので、裏どなりの物音や話声が手に取るようによく聞える。わたくしは能く耳よを押つけて笑う事があつた。

「また、そんなとこ。暑いのにさ。」

上つて来たお雪はすぐ窓のある三畳の方へ行つて、染模様の剥はげたカーテンを片寄せ、

「此方こつちへおいでよ。いい風だ。アラまた光つてる。」

「さつきより幾らか涼しくなつたな、成程いい風だ。」

窓のすぐ下は日蔽ひおひの葭簀よしずに遮さへぎられているが、溝の向側に並んだ家の二階と、窓口に坐つている女の顔、往つたり来たりする人影、路地一帯の光景は案外遠くの方まで見通すことができる。屋根の上の空は鉛色に重く垂下つて、星も見えず、表通のネオンサインに半なかぞ空くまでも薄赤く染められているのが、蒸暑い夜を一層蒸暑くしている。お雪は座布団を取つて窓の敷居に載せ、その上に腰をかけて、暫く空の方を見ていたが、「ねえ、あなた」と突然わたくしの手を握り、「わたし、借金を返しちまつたら。あなた、おかみさんにしてくれない。」

「おれ見たようなもの。仕様がないうじやないか。」

「ハスになる資格がないって云うの。」

「食べさせることができなかつたら資格がないね。」

お雪は何とも言わず、路地のはずれに聞え出したヴィヨロンの唄につれて、鼻唄をうたかけたので、わたくしは見るともなく顔を見ようとすると、お雪はそれを避けるように急に立上り、片手を伸して柱につかまり、乗り出すように半身を外へ突出した。

「もう十年わかけれど……。」わたくしは茶ぶ台の前に坐つて巻煙草に火をつけた。

「あなた。一体いくつなの。」

此方こなたへ振向いたお雪の顔を見上ると、いつものように片かた鬢えくぼを寄せているので、わたくしは何とも知れず安心したような心持になつて、

「もうじき六十さ。」

「お父さん。六十なの。まだ御丈夫。」

お雪はしげしげとわたくしの顔を見て、「あなた。まだ四十にやならないね。三十七か八かしら。」

「おれはお妻めかけさんさんに出来た子だから、ほんとの年はわからない。」

「四十にしても若いね。髪の毛なんぞそうは思えないわ。」

「明治三十一年生うまれだね。四十だと。」

「わたしはいくつ位に見えて。」

「二十一二に見えるが、四ぐらいかな。」

「あなた。口がうまいから駄目。二十六だわ。」

「雪ちゃん、お前、宇都の宮で芸者をしていたって言ったね。」

「ええ。」

「どうして、ここへ来たんだ。よくこの土地の事を知っていたね。」

「暫く東京にいたもの。」

「お金のいることがあったのか。」

「そうでもなければ……。檀那は病気で死んだし、それに少し……。」「

「馴れない中は驚いたろう。芸者とはやり方がちがうから。」

「そうでもないわ。初めツから承知で来たんだもの。芸者は掛りまげがして、借金の抜け
る時がないもの。それに……。身を落すなら稼かせぎいい方が結句けっく徳だもの。」

「そこまで考えたのは、全くえらい。一人でそう考えたのか。」

「芸者の時分、お茶屋の姐ねえさんで知ってる人が、この土地で商売していたから、話をきいたのよ。」

「それにしても、えらいよ。年ねんがあけたら少し自前じまえで稼いで、残せるだけ残すんだね。」

「わたしの年は水商売には向くんだとき。だけれど行先の事はわからないわ。ネエ。」

じつと顔を見詰められたので、わたくしは再び妙に不安な心持がした。まさかとは思うものの、何だか奥歯はさに物の挟はさまっているような心持がして、此度こんどはわたくしの方が空の方へでも顔を外そむ向けむけなくなつた。

表通りのネオンサインが反映する空のはずれには、先程から折々稲妻ひらめが閃ひらめいていたが、この時急に鋭い光が人の目を射た。然し雷の音らしいものは聞えず、風がぱったり歇やんで日の暮の暑さが又むし返されて来たようである。

「いまに夕立が来そうだな。」

「あなた。髪結さんの帰り……もう三月みつきになるわネエ。」

わたくしの耳にはこの「三月になるわネエ。」と少し引延ばしたネエの声が何やら遠いむかしを思返すとも云うように無限の情じょうを含んだように聞きなされた。「三月になりま

す。」とか「なるわよ。」とか言切つたら平常つねの談話に聞えたのであろうが、ネエと長く

引いた声は咏嘆えいたんの音おんというよりも、寧むしろそれとなくわたくしの返事を促す為に遣われたもののようにも思われたので、わたくしは「そう……。…」と答えかけた言葉さえ飲み込んでしまつて、唯目容まなざしで応答をした。

お雪は毎夜路地へ入込む数知れぬ男に応接する身でありながら、どういつ訳で初めてわたくしと逢つた日の事を忘れずにいるのか、それがわたくしには有り得べからざる事のよう
うに考えられた。初ての日を思返すのは、その時の事を心に嬉しく思うが為と見なければ
ならない。然しわたくしはこの土地の女がわたくしのような老人としよりに対して、尤も先方もつとで
はわたくしの年を四十歳位に見ているが、それにしても好いたの惚ほれたのというような若
くはそれに似た柔あたたかく温な感情を起し得るものとは、夢にも思つて居なかつた。

わたくしが殆ど毎夜のように足繁く通つて来るのは、既に幾度か記述したように、種いろい
々な理由があつたからである。創作「失踪」の实地観察。ラディオからの逃走。銀座丸
ノ内のような首都枢要の市街に対する嫌悪。其他の理由もあるが、いずれも女に向つて語
り得べき事ではない。わたくしはお雪の家を夜の散歩の休憩所きゆうけいじよにしていたに過ぎないので
あるが、そうする為には方便として口から出まかせの虚言うそもついた。故意に欺くつもりで
はないが、最初女の誤り認めた事を訂正もせず、寧ろ興にまかせてその誤認を猶深なほくする

ような挙動や話をして、身分を晦くらした。この責だけは免れないかも知れない。

わたくしはこの東京のみならず、西洋に在つても、売笑の巷ちまたの外、殆ほとんど他の社会を知らないと言つてもよい。其由来はここに述べたくもなく、又述べる必要もあるまい。若しわたくしなる一人物の何者たるかを知りたいと云うような酔興な人があつたなら、わたくしが中年のころにつくつた対話「昼すぎ」漫筆「妾しやうたく宅」小説「見果てぬ夢」の如き悪文を一読せられたなら思い半なかばに過るものがある。とは言ふものの、それも文章が拙つたなく、くどくどしくて、全篇をよむには面倒であろうから、ここに「見果てぬ夢」の一節を抜摘しよう。「彼が十年一日の如く花柳界に出入する元氣のあつたのは、つまり花柳界が不正暗黒の巷である事を熟知していたからで。されば若し世間が放蕩者ほうとうしやを以て忠臣孝子の如く称賛するものであつたなら、彼は邸宅を人手に渡してまでも、其称賛の声を聞こうとはしなかつたであろう。正当な妻女の偽善的虚栄心、公明なる社会の詐欺的活動に対する義憤は、彼をして最初から不正暗黒として知られた他の一方に馳はせ赴おもむかした唯一の力であつた。つまり彼は真白だと称する壁の上に汚い種さまざま々な汚点しみを見出すよりも、投捨てられた檻らん樓るの片にも美しい縫取りの残りを発見して喜ぶのだ。正義の宮殿にも往々にして鳥や鼠の糞ふんが落ちていると同じく、悪徳の谷底には美しい人情の花と香かしい涙の果実かえつが却て沢山

に摘み集められる。」

これを読む人は、わたくしが溝の臭気と、蚊の声の中に生活する女達を深く恐れもせず、醜いともせず、むしろ見ぬ前から親しみを覚えていた事だけは推察せられるであろう。わたくしは彼女達かのおんなたちと懇意になるには——少くとも彼女達から敬して遠ざけられないためには、現在の身分はかくしている方がよいと思つた。彼女達から、こんな処へ来ずともよい身分の人だのに、と思われるのは、わたくしに取つてはいかにも辛い。彼女達の薄倖はぶつこうな生活を芝居でも見るように、上から見下みおろしてよろこぶのだと誤解せられるような事は、出来得るかぎり之を避けたいと思つた。それには身分を秘するより外はない。

こんな処へ来る人ではないと言われた事については既に実例がある。或夜、改正道路のはずれ、市営バス車庫の辺ほとりで、わたくしは巡査に呼止められて尋問せられたことがある。わたくしは文学者だの著述業だのと自分から名乗りを揚げるのも厭いやであるし、人からそう思われるのは猶更嫌いであるから、巡査の問に対しては例の如く無職の遊民と答えた。巡査はわたくしの上着を剥取はぎつて所持品を改める段になると、平素夜行の際ふだん、不審尋問に遇う時の用心に、印鑑と印鑑証明書と戸籍抄本とが囊のうちゆう中に入れてある。それから紙入には翌日の朝大工と植木屋と古本屋とに払いがあつたので、三四百円の現金が入れてあつた。

巡査は驚いたらしく、俄にわかにわたくしの事を資産家とよび、「こんな処は君見たような資産家の来るところじゃない。早く帰りましたまえ、間違ひがあるといかんから、来るなら出直して来たまえ。」と云つて、わたくしが猶愚図々々しているのを見て、手を挙げて円タクを呼止め、わざわざ戸を明けてくれた。

わたくしは已やむことを得ず自動車に乗り改正道路から環状線とかいう道を廻った。つまり迷ラビラント宮の外廓を一周して、伏見稻荷の路地口に近いところで降りた事があつた。それ以来、わたくしは地図を買つて道を調べ、深夜は交番の前を通らないようにした。

わたくしは今、お雪さんが初めて逢つた日の事を咏嘆的な調子で言出したのに対して、答うべき言葉を見付けかね、煙草の烟けむりの中にせめて顔だけでもかくしたい気がしてまたもや巻煙草を取出した。お雪は黒目がちの目でじつと此方こなたを見詰めながら、

「あなた。ほんとに能く肖にているわ。あの晩、あたし後姿を見た時、はつと思つたくらい……。」

「そうか。他人のそら肖つて、よくある奴さ。」わたくしはまア好かつたと云う心持を生懸命に押隠した。そして、「誰に。死んだ檀那に似ているのか。」

「いいえ。芸者になつたばかりの時分……。一緒になれなかつたら死のうと思つたの。」

「逆上せきると、誰しも一時はそんな気を起す……。」「

「あなたも。あなたなんぞ、そんな気にやアならないでしょう。」「

「冷静かね。然し人は見掛によらないもんだからね。そう見くびったもんでもないよ。」「

お雪は片^{かた}鬢^{えくぼ}を寄せて笑顔をつくったばかりで、何とも言わなかった。少し下唇の出した口尻の右側に、おのずと深く穿^{うが}たれる片えくぼは、いつもお雪の顔立を娘のようにあどけなくするのであるが、其夜にかぎって、いかにも無理に寄せた鬢のように、言い知れず淋しく見えた。わたくしは其場をまぎらす為に、

「また歯がいたくなつたのか。」「

「いいえ。さつき注射したから、もう何ともない。」「

それなり、また話が途絶えた時、幸にも馴染^{なじみ}の客らしいものが店口の戸を叩いてくれた。お雪はつと立って窓の外に半身を出し、目かくしの板越しに下を覗^{のぞ}き、

「アラ竹さん。お上んなさい。」「

馳^かけ降りる後^{あと}からわたくしも続いて下り、暫く便所の中に姿をかくし客の上つてしまうのを待つて、音のしないように外へ出た。

八

来そうに思われた夕立も来る様子はなく、火種を絶さぬ茶の間の蒸暑さと蚊の群とを恐れて、わたくしは一時外へ出たのであるが、帰るにはまだ少し早いらしいので、溝づたいに路地を抜け、ここにも板橋のかかつている表の横町に出た。両側に縁日商あきゆうど人が店を並べているので、もともと自動車の通らない道幅は猶更狭くなって、出さかる人は押合いながら歩いている。板橋の右手はすぐ角に馬肉屋のある四辻よつ辻で。辻の向側には曹洞宗東清寺と刻しるした石碑と、玉の井稲荷の鳥居と公衆電話とが立っている。わたくしはお雪の話からこの稲荷の縁日は月の二日と二十日の両日である事や、縁日の晩は外ばかり賑にぎやかで、路地の中は却て客足が少いところから、窓の女達は貧乏稲荷と呼んでいる事などを思出し、人込みに交って、まだ一度も参詣さんけいしたことの無い祠やしろの方へ行つて見た。

今まで書くことを忘れていたが、わたくしは毎夜この盛場へ出掛けるように、心持にも身体にも共々に習慣がつくようになってから、この辺あたりの夜店を見歩いている人達の風俗に倣ならって、出がけには服装みなりを変えることにしていたのである。これは別に手数のかかる事ではない。襟えりの返る縞のホワイトシャツの襟元のぼたんをはずして襟飾をつけない事、洋服の

上着は手に提げて着ない事、帽子はかぶらぬ事、髪の毛は櫛くしを入れた事も無いように搔かき乱だして置く事、ズボンは成るべく膝や尻の摺すり切れたくらいな古いものに穿はき替かえる事。

靴は穿かず、古下駄も踵かかとの方が台まで摺りへつてゐるのを捜して穿く事、煙草は必かならずバツトに限る事、エトセトラエトセトラである。だから訳はない。つまり書齋に居る時、また来客を迎える時の衣服をぬいで、庭掃除や煤すすはらい 払ひの時のものに着替え、下女の古下駄を貰つてはけばよいのだ。

古ズボンに古下駄をはき、それに古手拭をさがし出して鉢巻の巻方も至極不意ぶいき気にすれば、南は砂町、北は千住から葛西金町かさいかなまちあたり辺まで行こうとも、道行く人から振返つて顔を見られる氣遣いはない。其町に住んでゐるものが買物にでも出たように見えるので、安心して路地へでも横町へでも勝手に入り込むことができる。この不様ぶさまな身なりは、「じだらくに居れば涼しき二階かな。」で、東京の氣候の殊に暑さの甚しい季節には最適もつとも合してゐる。朦朧もうろう 円タクの運転手と同じようなこの風をしていけば、道の上と云わず電車の中といわず何処どこでも好きな処へ啖たんつば 唾も吐けるし、煙草の吸殻、マツチの燃残り、紙屑、バナナの皮も捨てられる。公園と見ればベンチや芝生へ大の字なりに寝転んで鼾いびきをかこうが浪な花節にわぶしを唸うなろうが是これまた勝手次第なので、啻ただに氣候のみならず、東京中の建築物とも調和

して、いかにも復興都市の住民らしい心持になることが出来る。

女子がアツパツパと称する下着一枚で戸外に出歩く奇風については、友人佐藤慵齋君ようさいの文集に載っている其論そのに譲つて、ここには言うまい。

わたくしは素足に穿き馴れぬ古下駄を突掛つツけているので、物に躓つまずいたり、人に足を踏まれたりして、怪我をしないように気をつけながら、人ごみの中を歩いて向側の路地の突当りにある稲荷いんがに参詣さんけいした。ここにも夜店がつづき、祠ほこらの横手の稍やや広い空地は、植木屋うゑのきやが一面に並べた薔薇ばらや百合夏菊ゆりなどの鉢物はちものに時ならぬ花壇をつくっている。東清寺本堂とうせいじほんどう建こんり立ゆうの資金寄附者の姓名が空地の一隅に板塀いたへいの如くかけ並べてあるのを見ると、この寺は焼けたのでなければ、玉の井稲荷と同じく他所よそから移されたものかも知れない。

わたくしは常とこなつ夏なつの花一鉢あがなを購あがない、別の路地を抜けて、もと来た大正道路へ出た。すこし行くと右側に交番がある。今夜はこの辺あたりの人達と同じような服装みなりをして、植木鉢をも手にしているから大丈夫とは思つたが、避けるに若しくはないと、後戻りして、角に酒屋と水菓子屋のある道に曲つた。

この道の片側に並んだ商店うしろの後一帯の路地は所謂いわゆる第一部と名付けられたラビラントで、お雪の家の在る第二部を貫くかの溝は、突然第一部のはずれの道端に現われて、中島湯と

いう暖簾のれんを下したげた洗湯せんとうの前まへを流ながれ、許可地外そとの真暗まゝな裏長屋うらながやの間まに行先ゆきさきを没なしている。わたくしはむかし北廓きたがわを取巻といていた鉄漿溝おはぐろどぶより一層不潔ふけつに見える此溝ここのどぶも、寺島町てらじまがまだ田園でんえんであつた頃ころには、水草みずくさの花はなに蜻蛉とんぼのとまつていたような清きよい小流こながれであつたのであろうと、老人としよりにも似合にあわなない感傷かんじやう的な心持こころもちにならざるを得えなかつた。縁日えんじつの露店ろてんはこの通とほには出でていない。九州亭きゅうしやうというネオンサインを高く輝かがやかしている支那飯屋しなはんやの前まへまで来きると、改正道路かいせいだうろを走はる自動車じどうしゃの灯ひが見みえ蓄音機ちやくおんきの音ねが聞きえる。

植木鉢うゑきばちがなかなか重おもいので、改正道路かいせいだうろの方かたへは行いかず、九州亭きゅうしやうの四ツ角よつかくから右手みぎてに曲まると、この通とほは右側みぎがはにはラビラントの一部いちぶと二部にぶ、左側ひだりがはには三部さんぶの一いっ区劃くわくが伏在ふくざいしている最も繁華はんかな最もも狭せまい道みちで、呉服屋きふくやもあり、婦人用ふじんようの洋服屋やうふくやもあり、洋食屋やうじきやもある。ポストも立たっている。お雪ゆきが髪結かみむすの帰かへり夕立ゆふだちに遇あつて、わたくしの傘かさの下したに駈込かこんだのは、たしかこのポストの前まへあたりであつた。

わたくしの胸底むなそこには先刻さきごころお雪ゆきが半冗談ななばらしく感情かんじの一端いちたんをほのめかした時とき、わたくしの覺おぼえた不安ふあんがまだ消きえ去さらずにいるらしい……わたくしはお雪ゆきの履歴りふりについては殆たいていど知しるところがない。どこやらで芸者げんしやをしていたと言いつているが、長唄ながうたも清元きよもとも知らないらしいので、それも確かだとは思おもえない。最初の印象いんさうで、わたくしは何なにの拠よるところもなく、

吉原か洲崎あたりの左程わるくない家にいた女らしい気がしたのが、却て当っているのではなからうか。

言葉には少しも地方の訛なまりが無いが、其顔立と全身の皮膚の綺麗なことは、東京もしくは東京近在の女でない事を証明しているので、わたくしは遠い地方から東京に移住した人達の間を生れた娘と見ている。性質は快活で、現在の境涯をも深く悲しんではない。寧むしろこの境遇から得た経験もしてを資本にして、どうにか身の振方をつけようと考えているだけの元氣もあれば才智もあるらしい。男に対する感情も、わたくしの口から出まかせに言う事すら、其ま疑わずに聴き取るところを見ても、まだ全く荒すざみきってしまわない事は確かである。わたくしをして、然そう思わせるだけでも、銀座や上野辺あたりの広いカフェーに長年働いている女給などに比較したなら、お雪の如きは正直とも醇じゅん朴ぼくとも言える。まだまだ真面目な処はしながあるとも言えるであろう。

端はしな無くも銀座あたりの女給と窓の女とを比較して、わたくしは後者の猶なほ愛すべく、そして猶共に人情を語る事ができるもののように感じたが、街路の光景についても、わたくしはまた両方を見くらべて、後者の方が浅薄みちばたに外観の美を誇らず、見掛倒しでない事から不快の念を覚えさせる事が遙はるかに少ない。路傍みちばたには同じように屋台店が並んでいるが、ここ

では酔漢の三々五々隊をなして歩むこともなく、彼処では珍しからぬ血まみれ喧嘩もここでは殆ど見られない。洋服の身なりだけは相応にして居ながら其職業の推察しかねる人相の悪い中年者が、世を憚らず肩で風を切り、杖を振り、歌をうたい、通行の女子を罵りつつ歩くのは、銀座の外他の町には見られぬ光景であろう。然るに一たび古下駄に古ズボンをはいて此の場末に来れば、いかなる雑沓の夜でも、銀座の裏通りを行くよりも危険のおそれがなく、あちこちと道を譲る煩しさもまた少いのである。

ポストの立っている賑な小道も呉服屋のあるあたりを明い絶頂にして、それから先は次第にさむしく、米屋、八百屋、蒲鉾屋などが目に立って、遂に材木屋の材木が立掛けてあるあたりまで来ると、幾度となく来馴れたわたくしの歩みは、意識を待たず、すぐさま自転車預り所と金物屋との間の路地口に向けられるのである。

この路地の中にはすぐ伏見稲荷の汚れた幟が見えるが、素見ぞめきの客は気がつかないらしく、人の出入は他の路地口に比べると至って少ない。これを幸に、わたくしはいつも此路地口から忍び入り、表通の家の裏手に無花果の茂っているのと、溝際の柵に葡萄のからんでいるのを、あたりに似合わぬ風景と見返りながら、お雪の家の窓口を覗く事しているのである。

二階にはまだ客があると見えて、カーテンに灯影ほかげが映り、下の窓はあけたままであった。表のラデイオも今しがた歇やんだようなので、わたくしは縁日の植木鉢をそつと窓から中に入れて、其夜はそのまま白髻橋しらひげばしの方へ歩みを運んだ。後うしろの方から浅草行の京成バスが走って来たが、わたくしは停留場のある処をよく知らないのです、それを求めながら歩きつづけると、幾程もなく行先に橋の燈火のきらめくのを見た。

*

*

*

わたくしはこの夏のはじめに稿を起した小説「失踪」の一篇を今日こんにちに至るまでまだ書き上げずにいるのである。今夜お雪が「三月みつきになるわねえ。」と言ったことから思合せる、起稿の日はそれよりも猶以前であった。草稿の末節は種田順平が貸間の暑さに或夜同宿の女給すみ子を連れ、白髻橋の上で涼みながら、行末の事を語り合うところで終つていたので、わたくしは堤を曲らず、まっすぐに橋をわたって欄干に身を倚よせて見た。

最初「失踪」の布局を定める時、わたくしはその年二十四になる女給すみ子と、其年五十一になる種田の二人が手軽く情交を結ぶことにしたのであるが、筆を進めるにつれて、

何やら不自然であるような気がし出したため、折からの炎暑と共に、それなり中休みをしていたのである。

然るに今、わたくしは橋の欄干に凭れ、下流の公園から音頭踊の音楽と歌声との響いて来るのを聞きながら、先程お雪が二階の窓にもたれて「三月になるわネエ。」といった時の語調や様子を思返すと、すみ子と種田との情交は決して不自然ではない。作者が都合の好いように作り出した脚色として拆けるにも及ばない。最初の立案を途中で変える方が却てよからぬ結果を齎すかも知れないと云う心持にもなつて来る。

雷門から円タクを傭つて家に帰ると、いつものように顔を洗い髪を搔直した後、すぐさま硯の傍の香炉に香を焚いた。そして中絶した草稿の末節をよみ返して見る。

「あすこに見えるのは、あれは何だ。工場か。」

「瓦斯会社か何かだわ。あの辺はむかし景色のいいところだったんですってね。小説でよんだわ。」

「歩いて見ようか。まだそんなに晩かアない。」

「向へわたると、すぐ交番があつてよ。」

「そうか。それじゃ後へ戻ろう。まるで、悪い事をして世を忍んでいるようだ。」

「あなた。大きな声……およしなさい。」

「……………」

「どんな人が聞いていないとも限らないし……。」

「そうだね。然し世を忍んで暮すのは、初めて経験したんだが、何ともいえない、何となく忘れられない心持がするもんだね。」

「浮世離れてツて云う歌があるじゃないの。……奥山ずまい。」

「すみちゃん。おれは昨夜から急に何だか若くなつたような気がしているんだ。昨夜だけでも活がいがあつたような気がしているんだ。」

「人間は気の持ちようだわ。悲観しちまつちや駄目よ。」

「全くだね。然し僕は、何にしてももう若くないからな。じきに捨てられるだろう。」

「また。そんな事、考える必要なんかないっていうのに。わたしだって、もうすぐ三十じゃないのさ。それにもう、為たい事はしちまつたし、これからはすこし真面目になつて稼いで見たいわ。」

「じゃ、ほんとおでん屋をやるつもりか。」

「あしたの朝、照ちゃんが来るから手金だけ渡すつもりなの。だから、あなたのお金は当分遣わずに置いて下さい。ね。昨夜も御話したように、それがいいの。」

「然し、それじゃア……。」

「いいえ。それがいいのよ。あなたの方に貯金があれば、後が安心だから、わたしの方は持つてるだけのお金をみんな出して、一時払いにして、権利も何も彼も買ってしまおうと思ってるのよ。どの道やるなら其方が徳だから。」

「照ちゃんて云うのは確な人かい。とにかくお金の話だからね。」

「それは大丈夫。あの子はお金持だもの。何しろ玉の井御殿の檀那だんなって云うのがパトロンだから。」

「それは一体何だ。」

「玉の井で幾軒も店や家を持つてる人よ。もう七十位だわ。精力家よ。それア。時々カフエーへ来るお客だったの。」

「ふーむ。」

「わたしにもおでん屋よりか、やるなら一層いっそうの事、あの方の店をやれて云うのよ。店も玉も照ちゃんが檀那にそう言つて、いいのを紹介するって云うのよ。だけれど、其時に

はわたし一人きりで、相談する人もないし、わたしが自分でやるわけにも行かないしするから、それでおでん屋かスタンドのような、一人でやれるものの方がいいと思ったのよ。」

「そうか、それであの土地を扱んだんだね。」

「照ちゃんは母さんにお金貸をさせているわ。」

「事業家だな。」

「ちやつかりしてるけれども、人をだましたりなんかしないから。」

.....

九

九月も半^{なか}ちかくな^なつたが残暑はすこしも退^{しりぞ}かぬばかりか、八月中よりも却て烈しくなつたように思われた。簾^{すだれ}を撲^うつ風ばかり時にはいかにも秋らしい響を立てながら、それも毎日のように夕方になるとぱったり凪^ないでしまつて、夜^よはさながら関西の町に在るが如く、深^ふけるにつれてますます蒸暑くなるような日が幾日もつづく。

草稿をつくるのと、蔵書を曝さらすのとで、案外いそがしく、わたくしは三日ばかり外へ出なかつた。

残暑の日盛り蔵書を曝すのと、風のない初はつ冬ふゆの午ひる後すぎ庭の落葉を焚たく事とは、わたくしが独居の生涯の最も娯たのしみとしてゐる処である。曝ばく書しょは久しく高閣に束ねた書物を眺めやつて、初め熟読した時分の事を回想し時勢と趣味との変遷を思い知る機会をつくるからである。落葉を焚く楽しみは其身の市井しせいに在ることをしばしなりとも忘れさせるが故である。

古本の虫干だけはやつと済んだので、其日夕ゆうめし飯を終るが否やいつものように破れたズボンに古下駄をはいて外へ出ると、門の柱にはもう灯ひがついていた。夕ゆう風なぎの暑あつさに係かわらず、日はいつか驚くばかり短くなつてゐるのである。

わずか三日ばかりであるが、外へ出て見ると、わけもなく久しい間、行かねばならない処へ行かずにいたような心持がしてわたくしは幾分なりと途中の時間まで短くしようと、京橋の電車の乗換場から地下鉄道に乗った。若い時から遊び馴れた身でありながら、女を尋ねるのに、こんな気ぜわしい心持になつたのは三十年來絶えて久しく覺えた事がないと言つても、それは決して誇張ではない。雷門からはまた円タクを走らせ、やがていつもの

路地口。いつもの伏見稲荷。ふと見れば汚れきつた奉納の幟のぼりが四五本とも皆新しくなつて、赤いのはなくなり、白いものばかりになつていた。いつもの溝際に、いつもの無花果と、いつもの葡萄、然しその葉の茂りはすこし薄くなつて、いくら暑くとも、いくら世間から見捨てられた此路地にも、秋は知らず知らず夜毎に深くなつて行く事を知らせていた。

いつもの窓に見えるお雪の顔も、今夜はいつもの潰島田つぶしではなく、銀杏いちじょう返しに手柄をかけたような、牡丹ぼたんとかよぶ鬘まげに變つていたので、わたくしは此方こなたから眺めて顔ちがいのしたのを怪しみながら歩み寄ると、お雪はいかにもじれつたそうに扉をあけながら、「あなた。」と一言強く呼んだ後、急に調子を低くして、「心配したのよ。それでも、まあ、よかつたねえ。」

わたくしは初め其意を解しかねて、下駄もぬがず上あがりぐち口へ腰をかけた。

「新聞に出ていたよ。少し違ふようだから、そうじゃあるまいと思つただけれど、随分心配したわ。」

「そうか。」やつと当あてがついたので、わたくしも俄に声をひそめ、「おれはそんなドジなまねはしない。始終気をつけているもの。」

「一体、どうしたの。顔を見れば別に何でもないんだけど、来る人が来ないと、何だか

妙にさびしいものよ。」

「でも、雪ちゃんは相変らずいそがしいんだらう。」

「暑い中は知れたものよ。いくらいそがしいたって。」

「今年はいつまでも、ほんとに暑いな。」と云った時お雪は「鳥渡しちよいとずかに。」と云いながらわたくしの額にとまった蚊を掌てのひらでおさえた。

家の内の蚊は前よりも一層多くなつたよう、人を刺す其針も鋭く太くなつたらしい。お雪は懐紙ふところがみでわたくしの額と自分の手についた血をふき、「こら。こんな。」と云つて其紙を見せて円める。

「この蚊がなくなれば年の暮だらう。」

「そう。去年お西とり様の時分にはまだ居たかも知れない。」

「やっぱり反歩たんぽか。」ときいたが、時代の違つてゐる事に気がついて、「この辺でも吉原の裏へ行くのか。」

「ええ。」と云いながらお雪はチリンチリンと鳴る鈴ねの音を聞きつけ、立つて窓口へ出た。兼ちゃん。ここだよ。何ボヤボヤしているのさ。氷白しらたま玉二つ……それから、ついでに蚊遣香を買つて来ておくれ。いい兎だ。」

そのまま窓に坐つて、通り過る素見客ひやかしにからかわれたり、又此方こつちからもからかつたりしている。其間々には中仕切の大阪格子を隔てて、わたくしの方へも話をしかける。氷屋の男がお待遠うと云つて逃あつちえたものを持つて来た。

「あなた。白玉なら食べるんでしょう。今日はわたしがおごるわ。」

「よく覚えているなア。そんな事……。」

「覚えてるわよ。実じつがあるでしょう。だからもう、そこから中浮気するの、お止よしなさい。」

「此処ここへ来ないと、どこか、他わきの家うちへ行くと思つてるのか。仕様がなない。」

「男は大概そうなもの。」

「白玉が咽喉のどへつかえるよ。食べる中うちだけ仲好くしようや。」

「知らない。」とお雪はわざと荒々しく匙さじの音をさせて山盛にした氷を突崩つきくずした。

窓口を覗のぞいた素見客が、「よう、姉さん、御馳走さま。」

「一つあげよう。口をおあき。」

「青酸加里か。命が惜しいや。」

「文無しのくせに、聞いてあきれらア。」

「何云いってやんでい。溝ツ蚊女郎。」と捨台詞すてぜりふで行き過るのを此方も負けて居よず、

「へッ。芥溜野郎。」

「はははは。」と後から来る素見客がまた笑って通り過ぎた。

お雪は氷を一匙口へ入れては外を見ながら、無意識に、「ちよつと、ちよつと、だーんな。」と節をつけて呼んでいる中、立止つて窓を覗くものがあると、甘えたような声をして、「お一人、じや上つてよ。まだ口あけなんだから。さア、よう。」と言つて見たり、また人によつては、いかにも殊勝らしく、「ええ。構いません。お上りになつてから、お気に召さなかつたら、お帰りになつても構いませんよ。」と暫くの間話をして、その挙句これも上らずに行つてしまつても、お雪は別につまらないという風さえもせず、思出したように、解けた氷の中から残つた白玉をすくい出して、むしやむしや食べたり、煙草をのんだりしている。

わたくしは既にお雪の性質を記述した時、快活な女であるとも言ひ、また其境涯をさほど悲しんでもいらないと言つた。それは、わたくしが茶の間の片隅に坐つて、破団扇の音も成るべくしないように蚊を追いながら、お雪が店先に坐つている時の、こういう様子^{のれん}を納簾の間から透し見て、それから推察したもの^{すか}に外ならない。この推察は極く皮相に止つている^{とどま}かも知れない。為^{ひととなり}人の一面を見たに過ぎぬかも知れない。

然しここにわたくしの觀察の決して誤らざる事を断言し得る事がある。それはお雪の性質の如何いかんに係らず、窓の外の人通りと、窓の内のお雪との間には、互に融和すべき一縷るの糸つなの繋がれていることである。お雪が快活の女で、其境遇を左程悲しんでいないように見えたのが、若もしわたくしの誤りであったなら、其誤はこの融和から生じたものだど、わたくしは弁解したい。窓の外は大衆である。即すなわち世間である。窓の内は一個人である。そしてこの両者の間には著しく相反目している何物もない。これは何なんに因るのであろう。お雪はまだ年が若い。まだ世間一般の感情を失わないからである。お雪は窓に坐っている間は、その身を卑しいものとなして、別に隠している人格を胸の底に持っている。窓の外を通る人は其歩みを此路地に入るるや仮面ちまたをぬぎ、矜きようぶ負ふを去るからである。

わたくしは若い時から脂粉ちまたの巷ちまたに入り込み、今にその非を悟らない。或時は事情とらに捉とらわれて、彼かの女おんな達たちの望むがまま家に納いれて箕帚きそうを把とらせたこともあつたが、然しそれは皆失敗に終つた。彼女達は一たび其境遇を替え、其身を卑しいものではないと思ふようになれば、一変して教う可からざる懶婦らんぷとなるか、然らざれば制御せいぎよしがたい悍婦かんぷになつてしまふからであつた。

お雪はいつとはなく、わたくしの力に依つて、境遇を一変させようと云う心を起してい

る。懶婦か悍婦かになろうとしている。お雪の後半生をして懶婦たらしめず、悍婦たらしめず、真に幸福なる家庭の人たらしめるものは、失敗の経験にのみ富んでいるわたくしではなくして、前途に猶多くの歳月を持つている人でなければならぬ。然し今、これを説いてもお雪には決して分ろう筈がない。お雪はわたくしの二重人格の一面だけしか見えない。わたくしはお雪の窺い知らぬ他の一面を曝露して、其非を知らしめるのは容易である。それを承知しながら、わたくしが躊躇躊躇しているのは心に忍びないところがあつたからだ。これはわたくしを庇うのではない。お雪が自らその誤解を覚つた時、甚しく失望し、甚しく悲しみはしまいかと云うことをわたくしは恐れて居たからである。

お雪は倦みつかれたわたくしの心に、偶然過去の世のなつかしい幻影を彷彿たらしめたミューズである。久しく机の上に置いてあつた一篇の草稿は若しお雪の心がわたくしの方に向けられなかつたなら、——少くとも然う云う気がしなかつたなら、既に裂き棄てられていたに違いない。お雪は今の世から見捨てられた一老作家の、他分そが最終の作とも思われる草稿を完成させた不可思議な激励者である。わたくしは其顔を見るたび心から礼を言いたいと思つている。其結果から論じたら、わたくしは処世の経験に乏しい彼の女を欺き、其身体のみならず其の真情をも弄んだ事になるであろう。わたくしは此の許され難

い罪の詫わびをしたいと心ではそう思いながら、そうする事の出来ない事情を悲しんでいる。その夜、お雪が窓口で言つた言葉から、わたくしの切ない心持はいよいよ切なくなつた。今はこれを避けるためには、重ねてその顔を見ないに越したことはない。まだ、今の中ならば、それほど深い悲しみと失望とをお雪の胸に与えずとも済むであろう。お雪はまだ其本名をも其生おいたち立たちをも、問われないままに、打うち明あける機会に遇わなかつた。今夜あたりがそれとなく別れを告げる瀬戸際で、もし之を越したなら、取返しのつかない悲しみを見なければなるまいと云うような心持が、夜のふけかけるにつれて、わけもなく激しくなつて来る。

物に追われるような此心持は、折から急に吹出した風が表通から路地に流れ込み、あち等こち等へ突当つた末、小さな窓から家の内なかまで入つて来て、鈴のついた納簾のれんの紐ひもをゆるする。其音につれて一しお深くなつたように思われた。其音は風鈴売れんじまどが櫺れん子じまど窓の外を通る時ともちがつて、此別天地より外には決して聞かれないものである。夏の末から秋になつても、打続く毎夜のあつきに今まで全く気のつかなくなつただけ、その響は秋の夜もいよいよまつたくの夜長らしく深ふけそめて来た事を、しみじみと思ひ知らせるのである。気のせいか通る人の登あしおと音も静さに冴さえ、そこ等の窓でくしやみをする女の声も聞える。

お雪は窓から立ち、茶の間へ来て煙草へ火をつけながら、思出したように、

「あなた。あした早く来てくれない。」と云った。

「早くつて、夕方か。」

「もつと早くさ。あしたは火曜日だから診察日なんだよ。十一時にしまうから、一緒に浅草へ行かない。四時頃までに帰つて来ればいいんだから。」

わたくしは行つてもいいと思つた。それとなく別盃べつぱいを酌くむために行きたい気はしたが、新聞記者と文学者とに見られて又もや筆誅ひつちゆうせられる事を恐れもするので、

「公園は具合のわるいことがあるんだよ。何か買うものでもあるのか。」

「時計も買いたいし、もうすぐ裕あわせだから。」

「あついあついと言つてる中、ほんとにもうじきお彼岸だね。裕はどのくらいするんだ。店で着るのか。」

「そう。どうしても三十円はかかるでしょう。」

「そのくらいなら、ここに持っているよ。一人で行つて誂あつらえておいでな。」と紙入を出した。

「あなた。ほんと。」

「気味がわるいのか。心配するなよ。」

わたくしは、お雪が意外のよろこびに眼を見張った其顔を、永く忘れないようにじっと見詰めながら、紙入の中の紙幣さつを出して茶ぶ台の上に置いた。

戸を叩く音と共に主人の声がしたので、お雪は何か言いかけたのも、それなり黙って、伊達締だてじめの間に紙幣さつを隠す。わたくしは突と立って主人あるじと入れちがい外へ出た。

伏見稲荷の前まで来ると、風は路地の奥とはちがつて、表通から真まっ向こうに突き入りいきなりわたくしの髪を吹乱した。わたくしは此処へ来る時の外はいつも帽子をかぶり馴れているので、風に吹きつけられたと思うと同時に、片手を挙げて見て始て帽子のないのに心づき、覚えす苦笑を浮べた。奉納の幟のぼりは竿さおも折れるばかり、路地口に屋台を据えたおでん屋の納簾と共にちぎれて飛びそうに閃ひらめき翻かえっている。溝の角の無花果いちじくと葡萄ぶどうの葉は、廃屋のかげになった闇の中にかさがさと、既に枯れたような響を立てている。表通りへ出ると、俄に広く打仰がれる空には銀河の影のみならず、星という星の光のいかにも森然として冴さえわた渡えわたっているのが、言知れぬさびしさを思わせる折も折、人家のうしろを走り過る電車の音と警笛の響とが烈風にかすれて、更にこの寂しさを深くさせる。わたくしは帰りの道筋を、白髯橋の方に取る時には、いつも隅田町郵便局の在るあたりか、又は向島劇場という

活動小屋のあたりから勝手に横道に入り、陋巷の間を迂曲する小道を辿り辿って、結局白髯明神の裏手へ出るのである。八月の末から九月の初めにかけては、時々夜になって驟雨の霽れた後、澄みわたった空には明月が出て、道も明く、むかしの景色も思出されるので、知らず知らず言問の岡あたりまで歩いてしまうことが多かつたが、今夜はもう月もない。吹き通す川風も忽ち肌寒くなって来るので、わたくしは地藏坂の停留場に行きつくが否や、待合所の板バメと地藏尊との間に身をちぢめて風をよけた。

十

四五日たつと、あの夜をかぎりもう行かないつもりで、秋裕の代まで置いて来たのにも係らず、何やらもう一度行つて見たい気がして来た。お雪はどうしたかしら。相変らず窓に坐っている事はわかりきつていながら、それとなく顔だけ見に行きたくて堪らない。お雪には気がつかないように、そつと顔だけ、様子だけ覗いて来よう。あの辺を一巡りして帰つて来れば隣のラディオも止む時分になるのであろうと、罪をラディオに塗付けて、わたくしはまたもや墨田川を渡つて東の方へ歩いた。

路地に入る前、顔をかくす為、鳥打帽を買い、素見客が五六人来合すのを待つて、その人達の蔭に姿をかくし、溝の此方からお雪の家を窺いて見ると、お雪は新形の鬘を元のつぶしに結び直し、いつものように窓に坐っていた。と見れば、同じ軒の下の右側の窓はこれまで閉めきつてあったのが、今夜は明くなつて、燈影の中に丸鬘の顔が動いている。新しい抱——この土地では出方さんとかいうものが来たのである。遠くからで能くはわからないが、お雪よりは年もとつているらしく容貌もよくはないようである。わたくしは人通りに交つて別の路地へ曲つた。

その夜はいつもと同じように日が暮れてから急に風が凪いで蒸暑くなつた為めか、路地の中の人出もまた夏の夜のように夥しく、曲る角々は身を斜めにしなければ通れぬ程で、流れる汗と、息苦しさに堪えかね、わたくしは出口を求めて自動車の走せちがう広小路へ出た。そして夜店の並んでいない方の舗道を歩み、実はそのまま帰るつもりで七丁目の停留場に佇立んで額の汗を拭つた。車庫からわずか一二町のところなので、人の乗つていない市営バスがあたかもわたくしを迎えるように来て停つた。わたくしは舗道から一歩踏み出そうとして、何やら急にわけもわからず名残惜しい気がして、又ぶらぶら歩き出すと、間もなく酒屋の前の曲角にポストの立つている六丁目の停留場である。ここには

五六人の人が車を待つていた。わたくしはこの停留場でも空しく三四台の車を行き過ぎせ、唯茫然として、白楊樹の立ちならぶ表通と、横町の角に沿うた広い空地の方を眺めた。

この空地には夏から秋にかけて、ついこの間まで、初めは曲馬、次には猿芝居、その次には幽霊の見世物小屋が、毎夜さわがしく蓄音機を鳴し立てていたのであるが、いつの間にか、もとのようになって、あたりの薄暗い灯影が水溜の面に反映しているばかりである。わたくしはとにかくもう一度お雪をたずねて、旅行をするからとか何とか言つて別れよう。其の方が颯の道を切つたような事をするよりは、どうせ行かないものなら、お雪の方でも後々の心持がわるくないであろう。出来ることなら、真の事情を打明けてしまいたい。わたくしは散歩したいにも其処がない。尋ねたいと思う人は皆先に死んでしまった。風流絃歌の巷も今では音楽家と舞踊家との名を争う処で、年寄が茶を啜つてむかしを語る処ではない。わたくしは図らずも此のラビラントの一隅に於いて浮世半日の閑を偷む事を知つた。そのつもりで邪魔でもあろうけれど折々遊びに来る時は快く上げてくれと、晩時ながら、わかるように説明したい……。わたくしは再び路地へ入つてお雪の家の窓に立寄つた。

「さア、お上んなさい。」とお雪は来る筈の人が来たという心持を、其様子と調子とに現

したが、いつものように下の茶の間には通さず、先に立って梯子はしごを上るので、わたくしも様子を察して、

「親方が居るのか。」

「ええ。おかみさんも一緒……。」

「新奇しんきのが来たね。」

「御飯たき焚たきのばアやも来たわ。」

「そうか。急に賑かになつたんだな。」

「暫く独りでいたら、大勢だと全くうるさいわね。」急に思出したらしく、「この間はありがとう。」

「好いいのがあつたか。」

「ええ。明日あしたあたり出来てくる筈よ。伊達だて締じめも一本買ったわ。これはもうこんななもの。

後で下へ行つて持つてくるわ。」

お雪は下へ降りて茶を運んで来た。姑しほらく窓に腰をかけて何ともつかぬ話をしていたが、主人あるじ夫婦は帰りそうな様子もない。その中うち梯子はしごの降おり口くちにつけた呼鈴よびかねが鳴る。馴染なじみの客が来た知らせである。

家の様子うちが今までお雪一人の時とは全くちがって、長くは居られぬようになり、お雪の方でもまた主人の手前を気兼ねしているらしいので、わたくしは言おうと思つた事もそのま
ま、半時間とはたたぬ中戸口うちを出た。

四五日過ると季節は彼岸に入った。空模様は俄にわかに変つて、南風なんふうに追われる暗雲の低く空を
行き過る時、大粒の雨は礫つぶてを打つように降りそそいで、忽たちまち歇やむ。夜を徹して小息おやも
もなく降りつづくこともあつた。わたくしが庭の葉雞頭は根もとから倒れた。萩の花は葉
と共に振り落され、既に実を結んだ秋海棠しゅうかいとうの紅い茎は大きな葉を剥はがれて、痛ましく
色が褪あせてしまった。濡れた木の葉と枯枝ことに狼藉ろうぜきとしてゐる庭のさまを生き残つた法ほ
師うし蟬せみと蟋蟀こおろぎとが雨の霽はれま霽はれまに嘆とき弔むらうばかり。わたくしは年々秋風秋雨に襲わ
れた後の庭のちを見るたびたび紅楼夢こうろうむの中にある秋窓風雨しゅうそうふうう夕ゆうと題めされた一篇の古詩を
想起す。

秋花惨淡秋草黄。

耿耿秋燈秋夜長。

已賞秋窓秋不尽。

那堪風雨助淒涼。

助秋風雨来何速。

驚破秋窓秋夢緑。

.....

そして、わたくしは毎年同じように、とても出来ぬとは知りながら、何とかうまく翻訳して見たいと思いい煩うのである。

風雨の中に彼岸は過ぎ、天気がからりと晴れると、九月の月も残り少く、やがて其年の十五夜になった。

前の夜もふけそめてから月が好かったが、十五夜の当夜には早くから一層曇りのない明月を見た。

わたくしがお雪の病んで入院していることを知ったのは其夜である。雇婆から窓口で聞いただけなので、病の何であるのかも知る由がなかった。

十月になると例年よりも寒さが早く来た。既に十五夜の晩にも玉の井稻荷の前通の商店に、「皆さん、障子張りかえの時が来ました。サービスに上等の糊を進呈。」とかいた紙が下っていたではないか。もはや素足に古下駄を引摺り帽子もかぶらず夜歩きをする時節ではない。隣家のラデイオも閉めた雨戸に遮られて、それほどわたくしを苦しめないよ

うになつたので、わたくしは家に居てもどうやら燈火に親しむことができるようになった。

*

*

*

東綺譚はここに筆を擱くべきであろう。然しながら若しここに古風な小説的結末をつけようと欲するならば、半年或は一年の後、わたくしが偶然思いがけない処で、既に素人になつて居るお雪に廻り逢う一節を書添えればよいであろう。猶又、この偶然の邂逅をして更に感傷的ならしめようと思つたなら、摺れちがう自動車とか或は列車の窓から、互に顔を見合しながら、言葉を交したいにも交すことの出来ない場面を設ければよいであろう。楓葉荻花秋は瑟瑟々たる刀禰河あたりの渡船で摺れちがう処などは、殊に妙であろう。

わたくしとお雪とは、互に其本名も其住所をも知らずにしまった。唯 東の裏町、蚊のわめく溝際どぶぎわの家で狎なれしんだばかり。一たび別れてしまえば生涯相逢うべき機会も手段もない間柄である。軽い恋愛の遊戯とは云いながら、再会の望みなき事を初めから知りぬいていた別離の情は、強しいて之これを語ろうとすれば誇張に陥り、之を軽々けいけいに叙し去れば

情を尽さぬ憾みがある。ピエールロッチの名著阿菊さんの末段は、能く這般の情緒を描き尽し、人をして暗涙を催さしむる力があつた。わたくしが東綺譚の一篇に小説的色彩を添加しようとしても、それは徒にロッチの筆を学んで至らざるの笑を招くに過ぎぬかも知れない。

わたくしはお雪が永く溝際の家において、極めて廉価に其媚を売るものでない事は、何のいわれもなく早くから之を予想していた。若い頃、わたくしは遊里の消息に通曉した老人から、こんな話をきかされたことがあつた。これほど気に入つた女はない。早く話をつけないと、外のお客に身受けをされてしまはせぬかと思うような気がすると、其女はきつと病気で死ぬか、そうでなければ突然厭な男に身受をされて遠い国へ行つてしまう。何の訳もない気病みというものは不思議に当るものだと言ふ話である。

お雪はあの土地の女には似合わしからぬ容色と才智とを持つていた。雞群の一鶴であつた。然し昔と今とは時代がちがうから、病むとも死ぬような事はあるまい。義理にからまれて思わぬ人に一生を寄せる事もあるまい……。

建込んだ汚らしい家の屋根つづき、風雨の来る前の重苦しい空に映る燈影を望みながら、お雪とわたくしとは真暗な二階の窓に倚つて、互に汗ばむ手を取りながら、唯それともな

く謎なぞのような事を言つて語り合つた時、突然閃き落ちる稲妻に照らされたその横顔。それは今も猶ありありと目に残つて消去らずにいる。わたくしは二十はたちの頃から恋愛の遊戯ふけに耽つたが、然し此の老境に至つて、このような癡夢ちむを語らねばならないような心持になるうとは。運命の人を揶揄やゆすることもまた甚しいではないか。草稿の裏には猶数行の余白がある。筆の行くまま、詩だか散文だか訳のわからぬものを書いて此夜うれいの愁を慰めよう。

残る蚊に額さされしわが血汐。

ふところ紙に

君は拭いて捨てし庭の隅。

葉雞頭のひとくき一茎立ちぬ。

夜よごとの霜のさむければ、

夕暮の風をも待たで、

倒れ死すべき定めも知らず、

錦しほなす葉の萎しおれながらに

色増す姿ぞいたましき。

病める蝶ありて

きずつ 傷きし翼によるめき、

かえり

返咲く花とうたがう鶏頭の

倒れ死すべきその葉かげ。

宿かる夢も

結ぶにひまなきおそあき晩秋の

たそがれ迫る庭の隅。

君とわかれしわが身ひとり、

倒れ死すべき鶏頭の一茎と

ならびて立てる心はいかに。

丙ひのえね子十月三十日脱稿

作後贅言^{ぜいげん}

向島寺島町に在る遊里の見聞記^{けんもんき}をつくつて、わたくしは之を 東綺譚と命名した。

の字は林述齋が墨田川を言現^{いあらわ}すために濫^{みだり}に作ったもので、その詩集には 上漁謡と題せられたものがある。文化年代のことである。

幕府瓦解の際、成島柳北が下谷和泉橋^{いずみはしどおり}通の賜邸^{しつてい}を引払い、向島須崎村^{すさきむら}の別荘を家となしてから其詩文には多くの字が用い出された。それから字が再び汎^{あまね}く文人墨客^{ぼつかく}の間に用いられるようになったが、柳北の死後に至つて、いつともなく見馴れぬ字となつた。

物徂徠は墨田川を澄江となしていたように思っている。天明の頃には墨田堤^{かつは}を葛坡^{がしほ}とした詩人もあつた。明治の初年詩文の流行を極めた頃、小野湖山は向島の文字を雅馴^{がしゆん}ならずとなし、其音によつて夢香洲^{むこうしゅう}の三字を考出したが、これも久しからずして忘れられてしまった。現時向島の妓街に夢香荘とよぶ連込宿がある。小野湖山の風流を襲^つぐ心であるのかどうか、未だ詳^{いままびらか}にするを得ない。

寺島町五丁目から六七丁目にわたった狭斜の地は、白髯橋しらひげばしの東方四五町のところに在る。即ち墨田堤の東北に在るので、上となすには少し遠すぎるような気がした。依よつてわたくしはこれを東と呼ぶことにしたのである。東綺譚はその初め稿を脱した時、直ただちに地名を取つて「玉の井雙紙どうし」と題したのであるが、後に聊いささか思うところがあつて、今の世には縁遠い字を用いて、殊更に風雅をよそおわせたのである。

小説の命題などについても、わたくしは十余年前井上唾々子いのうえああしを失い、去年の春神代こうじろそう帚そう葉翁ようわうの計ふを聞いてから、爾来じらい全く意見を問うべき人がなく、又それ等について諧語かいごする相手もなくなつてしまつた。東綺譚は若し帚葉翁が世に在るの日であつたなら、わたくしは稿を脱するや否や、直に走つて、翁を千駄木町せんだぎまちの寓居ぐうきよに訪おとな其閱読わすらわを煩わづらさねばならぬものであつた。何故なにゆゑかというに翁はわたくしなどより、ずっと早くからのラビラントの事情に通曉し、好んで之を人に語つていたからである。翁は坐中の談話がたまたまその地の事に及べば、まず傍人より万年筆を借り、バツトの箱の中身を抜き出し、其裏面に市中より迷宮に至る道路の地図を描き、ついで路地の出入口きを記し、その分れて那辺に至り又那辺に合するかを説明すること、掌たなこころを指すが如くであつた。

そのころ、わたくしは大抵毎晩のように銀座尾張町の四ツ角で翁に出逢つた。翁は人を

待合すのにカフェーや喫茶店を利用しない。待設けた人が来てから後、話をする時になつて初めて飲食店の椅子に坐るのである。それまでは康衢の一隅に立ち、時間を測つて、逢うべき人の来るのを待つているのであるが、その予測に反して空しく時を費すことがあつても、翁は決して怒りもせず悲しみもしない。翁の街頭に佇立むのは約束した人の来るのを待つためばかりではない。寧ろこれを利用して街上の光景を眺めることを喜んでいたからである。翁が生前屢わたくしに示した其手帳には、某年某月某日の条下に、某処に於いて見る所、何時より何時までの間、通行の女凡そ何人の中洋装をなすもの幾人。女給らしきものにして檀那らしきものと連立つて歩むもの幾人。物貰い門附幾人などと記してあつたが、これ等は町の角や、カフェーの前の樹の下などに立たずんで人を待つている間に鉛筆を走したものである。

今年残暑の殊に甚しかった或夜、わたくしは玉の井稻荷前の横町を歩いていた時、おでん屋か何かの暖簾の間から、三味線を抱えて出て来た十七八の一才顔立のいい門附から、「おじさん。」と親しげに呼びかけられた事があつた。

「おじさん、こつちへも遊びに来るのかい。」

初めは全く見忘れていたが、門附の女の糸切歯を出して笑う口元から、わたくしは忽ち

四五年前、銀座の裏町で帚葉翁と共にこの娘とはなしをした事があつたのを思出した。翁は銀座から駒込の家に帰る時、いつも最終の電車を尾張町の四辻か銀座三丁目の松屋前で待つている間、同じ停留場に立つている花売、辻占売、門附などと話をする。車に乗つてからも相手が避けなにかぎり話をしつづけるので、この門附の娘とは余程前から顔を知り合つていたのであつた。

門附の娘はわたくしが銀座の裏通りで折々見掛けた時分には、まだ肩揚げをして三味線を持たず、左右の手に四竹よっだけを握つていた。髪は桃割ももわれに結び、黒襟えりをかけた袂たもとの長い着物に、赤い半襟。赤い帯をしめ、黒塗の下駄の鼻緒も赤いのをかけた様子は、女義太夫の弟子でなければ、場末の色町の半玉のようにも見られた。細面ほそおもてのませた顔立から、首や肩のほっそりした身体からだつきもまたそういう人達に能く見られる典型的なものであつた。その生立や性質の型通りであるらしいことも、また恐らくは問うに及ばぬことであろう。

「すつかり、姉さんねえになつちまつたな。まるで芸者衆げいしやしゆだよ。」

「ほほほほ、おかしか無い。」と言いながら娘は平打ひらうちの簪かんざしを島田の根元にさし直した。

「おかしいものか。お前も銀座仕込じゃないか。」

「でも、あたい、もう彼方あっちへは行かないんだよ。」

「こつちの方がいいか。」

「此方こつちだつて、何処だつて、いいことはないよ。だけれど、銀座はあぶれると歩いちや帰れないし、仕様がなからね。」

「お前、あの時分は柳島へ帰るのだつたね。」

「ああ、今は請地うけじへ越したよ。」

「お腹なかがすいてるか。」

「いいえ、まだ宵よいの口だもの。」

銀座では電車賃をやった事もあつたので、其夜は祝儀五十銭を与えて別れた。その後一ト月ばかりたつて、また路端みちばたで出逢つたことがあるが、間もなく夜露も追々肌寒くなつて来たので、わたくしはこの町へ散歩に来ることも次第に稀になつた。しかしこの町の最も繁昌するのは、夜風の身に沁しむようになってからだと云うから、あの娘もこの頃は毎夜かかさずふけ渡る町を歩いているのであろう。

*

*

*

帚葉翁そうようおうとわたくしとが、銀座の夜深よふけに、初めてあの娘の姿を見た頃と、今年凶らず寺島町の路端でめぐり逢った時とを思合せると、歲月は早くも五年を過ぎている。この間に時勢の変ったことは、半玉のような此娘の着物の肩揚がとれ、桃割が結綿ゆいわたをかけた島田になつた其変りかたとは、同じ見方を以て見るべきものではあるまい。四竹を鳴して説経を唱うたっていた娘が、三味線をひいて流行唄はやりうたを歌う姉さんになつたのは、子ぼうふりが蚊になり、オボコがイナになり、イナがボラになつたと同じで、これは自然の進化である。マルクスを論じていた人が朱子学を奉ずるようになったのは、進化ではなくして別の物に變つたのである。前の者は空くうとなり、後の者は忽然こつぜんとして出現したのである。やどり蟹がにの殻の中に、蟹ではない別の生物が住んだようなものである。

われわれ東京の庶民が満洲の野やに風雲の起つた事を知つたのは其の前の年、昭和五六年の間であつた。たしかその年の秋の頃、わたくしは招魂社境内の銀杏いちょうの樹に三日ほどつづいて雀合戦のあつた事をきいて、その最終の朝麴こうじもち町ちやうの女達と共に之を見に行つたことがあつた。その又前の年の夏には、赤坂見附の濠ほりに、深更人の定さだまつた後、大きな蝦蟇がまが現れ悲痛な声を揚げて泣くという噂が立ち、或新聞の如きは蝦蟇を捕えた人に金参百円の賞を贈ると云う広告を出した。それが為め雨の降る夜などには却かえつて人出が多くなつたが、

賞金を得た人の噂も遂に聞かず、いつの間にかこの話は烟けむりのように消えてしまった。

雀合戦を見た其年も忽ち暮に迫った或日の午後、わたくしは葛西村かさいむらの海辺うみべを歩いて道に迷い、日が暮れてから燈火を目当にして漸く船堀橋ふなほりばしの所在を知り、二三度電車を乗りかえた後、洲崎の市電終点から日本橋の四辻に来たことがあった。深川の暗い町を通り過ぎた電車から、白木屋百貨店しろきやの横手に降りると、燈火の明るさと年の暮の雑沓ざつとつと、ラヂイオの軍歌とが一団になつて、今日の半日も夜になるまで、人跡じんせきの絶えた枯蘆かれあしの岸ばかりさまよつていたわたくしの眼には、忽然こつぜん異様な印象を与えた。またしても乗換の車を待つため、白木屋の店頭たなずに佇立たつたむと、店の窓には、黄色の荒原の処々ところどころに火の手の上つている背景を飾り、毛衣けころもで包んだ兵士の人形を幾個いくつとなく立て並べてあったのが、これ又わたくしの眼を驚した。わたくしは直にただち、街上に押合う群集の様子に眼を移したが、それは毎まいとし年の歳暮に見るものと何の変わりもなく、殊更に立止つて野營の人形を眺めるものはないらしいようであつた。

銀座通に柳の苗木が植えつけられ、両側の歩道に朱骨しゅぼねの雪洞ゆきぼりが造り花の間に連ねともされ、銀座の町が宛さなら田舎芝居なかにちやうの仲の町の場と云うような光景を呈し出したのは、次の年の四月ごろであつた。わたくしは銀座に立てられた朱骨のぼんぼりと、赤坂溜池ためいけの牛

肉屋の欄干が朱で塗られているのを目にして、都人の趣味のいかに低下し来たかを知った。霞ヶ関の義拳が世を震動させたのは柳まつりの翌月であった。わたくしは丁度其夕、銀座通を歩いていたので、この事を報道する号外の中では読売新聞のものが最も早く、朝日新聞がこれに就いたことを目撃した。時候がよく、日曜日に出たので、其夕銀座通はおびただしい人出であったが電信柱に貼付けられた号外を見ても群集は何等特別の表情を其面上に現さぬばかりか、一語のこれについて談話をするものもなく、唯露店の商人が休みもなく兵器の玩具に螺旋をかけ、水出しのピストルを乱射しているばかりであった。

帚葉翁が古帽子をかぶり日光下駄をはいて毎夜かかさず尾張町の三越前に立ち現れたのはその頃からであった。銀座通の裏表に処を扱ばず蔓延したカフェーが最も繁昌し、又最も淫卑に流れたのは、今日から回顧すると、この年昭和七年の夏から翌年にかけてのことであつた。いづこのカフェーでも女給を二三人店口に立たせて通行の人を呼び込ませる。裏通のバアに働いている女達は必ず二人ずつ一組になって、表通を歩み、散歩の人の袖を引いたり目まぜで誘ったりする。商店の飾付を見る振りをして立留り、男一人の客と見れば呼びかけて寄添い、一緒にお茶を飲みに行こうと云う怪し気な女もあつた。百

貨店でも売子の外に大勢の女を雇入れ、海水浴衣を着せて、女の肌身を衆人の目前に曝さらさせるようにしたのも、たしかこの年から初まったのである。裏通の角々にはヨウヨウとか呼ぶ玩具を売る小娘の姿を見ぬ事はなかつた。わたくしは若い女達が、其の雇主の命令に従つて、其の顔と其の姿とを、或は店先、或は街上に曝すことを恥とも思わず、中には往々得意らしいのを見て、公娼はりみせの張店が復興したような思をなした。そして、いつの世になつても、女を使役するには変らない一定の方法がある事を知つたような気がした。

地下鉄道は既に京橋の北詰まで開鑿かいさくせられ、銀座通には昼夜の別なく地中に鉄棒を打込む機械の音がひびきわたり、土工は商店の軒下に処嫌わず昼寝をしていた。

月島小学校の女教師おんなきょうしが夜になると銀座一丁目裏のラバサンと云うカフェーに女給となつて現れ、売春の傍枕かたわらさがしをして捕えられた事が新聞の紙上を賑にぎわした。それはやはりこの年昭和七年の冬であつた。

*

*

*

わたくしが初て帚葉翁まじわりただと交を訂したのは、大正十年の頃であらう。その前から古本の市いち

へ行くごとに出逢つていたところから、いつともなく話をするようになっていたのである。然し其後も会うところは相変らず古本屋の店先で、談話は古書に関することばかりであったので、昭和七年の夏、偶然銀座通で邂逅した際には、わたくしは意外の地で意外な人を見たような気がした為、其夜は立談をしたまま別れたくらいであった。

わたくしは昭和二三年のころから丁度其時分まで一時全く銀座からは遠のいていたのであつたが、夜眠られない病気が年と共に烈しくなつた事や、自炊に便利な食料品を買う事や、また夏中は隣家のラデイオを聞かないようにする事や、それ等のためにまたしても銀座へ出かけはじめたのであるが、新聞と雑誌との筆誅を恐れて、裏通を歩くにも人目を忍び、向の方から頭髮を振乱した男が折革包をぶら下げたり新聞雑誌を抱えたりして歩いて来るのを見ると、横町へ曲つたり電柱のかけにかくれたりしていた。

帚葉翁はいつも白足袋に日光下駄をはいていた。其風采を一見しても直に現代人でない事が知られる。それ故、わたくしが現代文士を忌み恐れている理由をも説くに及ばずして翁は能く之を察していた。わたくしが表通のカフエーに行くことを避けている事情をも、翁はこれを知っていた。一夜翁がわたくしを案内して、西銀座の裏通にあつて、殆ど客の居ない万茶亭という喫茶店へつれて行き、当分その処を会合処にしようと言つたのも、

わたくしの事情を知っていた故であつた。

わたくしは炎暑の時節いかに渴かつする時いえどもと雖、氷を入れた淡水の外冷いものは一切口にしない。冷水も成るべく之を避け夏も冬と変りなく熱い茶か珈コーヒー琲を飲む。アイスクリームの如きは帰朝以来今日まで一度も口にした事がないので、若し銀座を歩く人の中で銀座のアイスクリームを知らない人があるとしたなら、それは恐らくわたくし一人いちにんのみであらう。翁がわたくしを万茶亭に案内したのもまたこれが為であつた。

銀座通のカフェで夏になつて熱い茶と珈琲とをつくる店は殆ど無い。西洋料理店の中でも熱い珈琲をつくらぬ店さえある。紅茶と珈琲とはその味あじわいの半は香気なかなかに在るので、若し氷で冷却すれば香気は全く消失きえうせてしまう。然るに現代の東京人は冷却して香気のないものでなければ之を口にしない。わたくしの如き旧弊人きゆうへいじんにはこれが甚だ奇風に思われる。この奇風は大正の初にはまだ一般には行きわたつていなかった。

紅茶も珈琲も共に洋人の持ち来つたもので、洋人は今こんにち日と雖その冷却せられたものを飲まない。これを以て見れば紅茶珈琲の本来の特性は暖きにあるや明あきらである。今之を邦俗に従つて冷却するのは本来の特性を破損するもので、それはあたかも外国の小説演劇を邦語に訳す時土地人物の名を邦化するものと相似ている。わたくしは何事によらず物の本ほんせ

性を傷けることを悲しむ傾があるから、外国の文学は外国のものとして之を鑑賞したいと思うように、其食物の如きもまた邦人の手によつて塩梅せられたものを好まないものである。

万茶亭は多年南米の殖民地に働いていた九州人が珈琲を売るために開いた店だという事で、夏でも暖い珈琲を売っていた。然し其主人は帚葉翁と前後して世を去り、其店もまた閉されて、今はない。

わたくしは帚葉翁と共に万茶亭に往く時は、狭い店の中にあつきと蠅の多いのを恐れて、店先の並木の下に出してある椅子に腰をかけ、夜も十二時になって店の灯の消える時迄じつとしてゐる。家へ帰つて枕についても眠られない事を知つていたので十二時を過ぎても猶行くべきところがあれば誘われるままに行くことを辞さなかつた。翁はわたくしと相對して並木の下に腰をかけてゐる間に、万茶亭と隣接したラインゴルト、向側のサイセリヤ、スカール、オデツサなどいう酒場に入出する客の人数を数えて手帳にかきとめる。円タクの運転手や門附と近づきになつて話をする。それにも飽きると、表通へ物を買に行つたり路地を歩いたりして、戻つて来ると其の見て来た事をわたくしに報告する。今、どこの路地で無頼漢が神祇の礼を交していたとか、或は向の川岸で怪し気な女に袖を牽か

れたとか、曾てどこそこの店にいた女給が今はどこそこの女主人おんなあるじになつていたりとか云う類たぐいのはなしである。寺島町の横町でわたくしを呼止めた門附の娘も、初めて顔を見知つたのはこの並木の下であつたに違ひはない。

わたくしは翁の談話によつて、銀座の町がわずか三四年見ない間にすっかり変つた、其景況の大略を知ることができた。震災前ぜん表通に在つた商店で、もとの処に同じ業をつづけているものは数えるほどで、今は悉くことごと関西もしくは九州から来た人の経営に任ゆたねられた。裏通の到る処に海豚汁ふくじるや関西料理の看板がかけられ、横町の角々に屋台店の多くなつたのも怪しむには当らない。地方の人が多くなつて、外で物を食う人が増加したことは、いづこの飲食店も皆繁昌している事がこれを明にしている。地方の人は東京の習慣を知らない。最初停車場構内の飲食店、また百貨店の食堂で見覚えた事は悉く東京の習慣だと思込んでいたので、汁粉屋の看板を掛けた店へ来て支那蕎麦そばがあるかときき、蕎麦屋に入つて天麩てんぷ羅らを誂いぶかえ断つらられて訝いぶかし気な顔をするものも少くない。飲食店の硝子窓ガラスに飲食物の模型を並べ、之に価格をつけて置くようになったのも、蓋けだし已やむことを得ざる結果で、これまた其その範はんを大阪に則とつたものだという事である。

街ひに灯ひがつき蓄音機の響ひびが聞え初めると、酒気を帯びた男が四五人ずつ一組になり、互

に其腕を肩にかけ合い、腰を抱き合いして、表通といわず裏通といわず銀座中をひよろひよろさまよい歩く。これも昭和になつてから新あらたに見る所の景況で、震災後しきり頻にカフェーの出来はじめた頃にはまだ見られぬものであつた。わたくしは此不体裁にして甚だ無遠慮ぶえんりよな行動の原因するところを詳つまびらかにしないのであるが、其実例によつて考察すれば、昭和二年初めて三田の書生及三田出身の紳士が野球見物の帰り群ぐんをなし隊をつくつて銀座通を襲つた事を看過するわけには行かない。彼等は酔えいに乗じて夜店の商品を踏み壊し、カフェーに乱入して店内の器具のみならず家屋にも多大の損害を与え、制御の任に当る警吏と相争うに至つた。そして毎年二度ずつ、この暴行は繰返されて今日に及んでいる。わたくしは世の父兄にして未いまだ一人の深く之を憤り其子弟をして退学せしめたもののある事を聞かない。世は挙こぞつて書生の暴行を以て是ぜとなすものらしい。曾てわたくしも明治大正の交、乏ぼうを承うけて三田に教鞭きょうべんを把とつた事もあつたが、早く辞して去つたのは幸であつた。そのころ、わたくしは経営者中の一人いちにんから、三田の文学も稲門とうもんに負けないように尽力していただきたいと言われて、その愚劣なるに眉を顰ひそめたこともあつた。彼等は文学芸術を以て野球と同一に視ていたのであつた。

わたくしは元來その習癖よりして党を結び群をなし、其威を借りて事をなすことを欲し

ない。むしろ之を怯きようとなして排しりぞけている。治国の事はこれを避けて論外に措おく。わたくしは芸林に遊ぶものの往々社を結び党を立てて、己おのれくみに与するを揚げ与せざるを抑えようとするものを見て、之を怯となし、陋ろうとなすのである。その一例を挙げれば、曾て文藝春秋社の徒が、築地小劇場の舞台にその党の作品の上演せられなかつた事を含み、小山内薫の抱ける劇文学の解釈を以て誤れるものとなした事の如きを言うのである。

鴻雁こうがんは空を行く時列をつくつておのれを護ることに努めているが、鶯うぐいすは幽谷を出でて喬木きようぼくに遷うつらんとする時、群ぐんをもなさず列をもつくらない。然も猶鴻雁は獵者りようしやの砲火を逃のがれることができないではないか。結社は必ずしも身を守る道とは言えない。

婦女子の媚こびを売るものに就ついて見るも、また団結を以て安全となすものと、孤影しやうげ悄然ぜんとして猶且つ悲しまざるが如きものもある。銀座の表通に燈火を輝すカフエーを城郭となし、赤組と云い白組と称する団体を組織し、客の纏頭てんとうを貪むさほるものは女給の群むれである。風呂敷包をかかえ、時には雨傘を携え、夜店の人ごみにまぎれて窃ひそかに行こうじん人の袖を引くものは独立の街娼である。この両者は其外見頗異すこぶるる所があるが、その一たび警吏に追跡せらるるや、危難のその身に達することには何の差別もないのであろう。

*

*

*

今年昭和十一年の秋、わたくしは寺島町へ行く道すがら、浅草橋辺で花電車を見ようとする人達が路傍みちばたに堵かきをなしているのに出逢った。気がつくど手にした乗車切符がいつもよりは大形になって、市電二十五周年記念とかけてあった。何か事のある毎に、東京の街路には花電車というものが練り出される。今より五年前帚葉翁と西銀座万茶亭に夜をふかし馴れた頃、秋も既に彼岸を過ぎていたかも知れない。給仕人から今しがた花電車が銀座を通ったことを聞いた。そして、其夜の花電車は東京府下の町々が市内に編入せられたことを祝うためであつた事をも見て来た人から聞き伝えたのであつた。是これより先、まだ残暑のさり切らぬころ、日比谷の公園に東京音頭と称する公開の舞踏会が挙行せられたことも、わたくしはやはり見て来た人から聞いたことがあつた。

東京音頭は郡部の地が市内に合併し、東京市が広くなつたのを祝するために行われたように言われていたが、内情は日比谷の角にある百貨店の広告に過ぎず、其店で揃そろいの浴衣ゆかたを買わなければ入場の切符を手に入れることができないとの事であつた。それはとにかく、東京市内の公園で若い男女の舞踏をなすことは、これまで一たびも許可せられた前例がな

い。地方農村の盆踊さえたしか明治の末頃には県知事の命令で禁止せられた事もあった。東京では江戸のむかし山の手の屋敷町に限って、田舎から出て来た奉公人が盆踊をする事を許されていたが、町民一般は氏神の祭礼に狂^{きょうほん}奔するばかりで盆に踊る習慣はなかったのである。

わたくしは震災前^{ぜん}、毎夜帝国ホテルに舞踏の行われた時、愛国の志士が日本刀を振^{ふる}つて場内に乱入した為、其後舞踏の催しは中止となった事を聞いていたので、日比谷公園に公開せられた東京音頭の会場にも何か騒ぎが起りはせぬかと、内心それを期待していたが、何事も無く音頭の踊は一週間の公開を終った。

「どうも、意外な事だね。」とわたくしは帚葉翁^{うすひげ}を顧て言った。翁は薄鬚^{はや}を生した口元に笑を含ませ、

「音頭とダンスとはちがうからでしょう。」

「しかし男と女が大勢一緒になって踊るのだから、同じ事じゃないですか。」

「それは同じだが、音頭の方は男も女も洋服を着ていない。浴衣をきているからいいでしょう。肉体を露出しないからいいでしょう。」

「そうかね、しかし肉体を露出する事から見れば、浴衣の方があぶないじゃないですか。」

女の洋装は胸の方が露出されているが腰から下は大丈夫だ。浴衣は之とは反対なものですぜ。」

「いや、先生のように、そう理窟詰めにされてはどうにもならない。震災の時分、夜警団の男が洋装の女の通りかかるのを尋問した。其時何か癩しやくにさわる事を言つたと云うので、女の洋装を剥はぎ取つて、身体検査をしたとか、しないとか大騒さわぎな事があつたです。夜警団の男も洋装を着ていた。それで女の洋装するのが癩しやくにさわると云うんだから理窟にはならない。」

「そういえば女の洋装は震災時分にはまだ珍しい方だつたね。今では、こうして往来を見ていると、通る女の半分は洋装になつたね。カフエー、タイガーの女給も二三年前から夏は洋服が多くなつたようですね。」

「武断政治の世になつたら、女の洋装はどうなるでしょう。」

「踊も浴衣ならいと云う流儀なら、洋装ははやらなくなるかも知れませんね。然し今の女は洋装をよしたからと云つて、日本服を着こなすようにはならないと思いますよ。一度崩れてしまつたら、二度好くなることはないですからね。芝居でも遊芸でもそうですね。文章だつてそうじゃないですか。勝手次第にくずしてしまつたら、直そうと思つたつて、

もう直りはしないですよ。」

「言文一致でも鷗外先生のものだけは、朗吟する事ができますね。」帚葉翁は眼鏡をはずし両眼を閉じて、伊沢蘭軒が伝の末節を唱えた。「わたくしは学殖なきを憂うる。常識なきを憂えない。天下は常識に富める人の多きに堪えない。」

*

*

*

こんな話をしていると、夜は案外早くふけわたって、服部の時計台から十二時を打つ鐘の音が、其頃は何となく耳新しく聞きなされた。

考証癖の強い翁は鐘の音をきくと、震災前まで八官町に在った小林時計店の鐘の音が、明治のはじめには新橋八景の中にも数えられていた事などを語り出す。わたくしは明治四十四五年の頃には毎夜妓家の二階で女の帰って来るのを待ちながら、かの大時計の音に耳を澄した事などを思出すのであった。三木愛花の著した小説芸者節用などはなしも、わたくし達二人の間には屢語り出される事があった。

万茶亭の前の道路にはこの時間になると、女給や酔客の帰りを当込んで円タクが集って

来る。この附近の酒場でわたくしが其名を記憶しているのは、万茶亭の向側にはオデツサ、スカール、サイセリヤ、此方こなたの側にはムウランルージュ、シルバースリツパ、ラインゴルトなど。また万茶亭と素人屋しもたやとの間の路地裏にはルパン、スリイシスタ、シラムレンなど名づけられたものがあつた。今も猶在るかも知れない。

服部の鐘の音を合図に、それ等の酒場やカフェエーが一斉に表の灯ひを消すので、街路まちにわかは俄に薄暗く、集つて来る円タクは客を載せても徒いたずらに喇叭らっばを鳴すばかりで、動けない程込み合うちう中、運転手の喧嘩がはじまる。かと思うと、巡查の姿が見えるが早いか、一輛残らず逃げ失せてしまふが、暫くして又もとのように、その辺一帯をガソリン臭くしてしまふのである。

帚葉翁はいつも路地を抜け、裏通から尾張町の四ツ角に出いで、既に一群をなして赤電車を待つている女給と共に路傍に立ち、顔馴染なしみのものがいると先方の迷惑をも顧ず、大きな声で話をしかける。翁は毎夜の見聞によつて、電車のどの線には女給が最も多く乗るか、又その行先は場末のどの方面が最も多いかという事を能く知っていた。自慢らしく其話に耽ふけつて、赤電車にも乗りそこなう事がたびたびであつたが、然しそういう場合にも、翁は敢て驚く様子もなく、却て之を幸とするらしく、「先生、少しお歩きになりませんか。そ

の辺までお送りしましょう。」と言う。

わたくしは翁の不遇なる生涯を思返して、それはあたかも、待っていた赤電車を眼前に逸しながら、狼狽の色を示さなかつた態度によく似ていたような心持がした。翁は郷里の師範学校を出て、中年にして東京に來り、海軍省文書課、慶応義塾図書館、書肆一誠堂編輯部其他に勤務したが、永く其職に居ず、晩年は専ら鉛槧に従事したが、これさえ多くは失敗に終つた。けれども翁は深く悲しむ様子もなく、閑散の生涯を利用して、震災後市井の風俗を観察して自ら娯しみとしていた。翁と交るものは其悠々たる様子を見て、郷里には資産があるものと思つていたが、昭和十年の春俄に世を去つた時、其家には古書と甲冑と盆栽との外、一銭の蓄もなかつた事を知つた。

この年銀座の表通は地下鉄道の工事最中で、夜店がなくなる頃から、凄じい物音が起り、工夫の恐しい姿が見え初めるので、翁とわたくしとの漫歩は、一たび尾張町の角まで運ば出されても、すぐさま裏通に移され、おのずから芝口の方へと導かれるのであつた。土橋か難波橋かをわたつて省線のガードをくぐると、暗い壁の面に、血盟団を釈放せよなど、不穩な語をつらねたいろいろの紙が貼つてあつた。其下にはいつも乞食が寝ている。ガードの下を出ると歩道の片側に、「栄養の王座」など書いた看板を出し、四角な水槽に鰻

を泳がせ釣針を売る露店が、幾軒となく桜田本郷町の四ツ角ちかくまで続いて、カフェーの女給や、近所の遊人らしい男が大勢集っている。

裏通へ曲ると、停車場の改札口と向い合った一ひとすじ条の路地があつて、其両側に鮓屋すしと料理屋が並んでいる。その中には一軒わたくしの知っている店もある。暖簾のれんに焼鳥金兵衛とするした家で、その女主人おんなあるじは二十余年のむかし、わたくしが宗十郎町の芸者家に起臥していた頃、向側の家にいた名妓なにかしというものである。金兵衛の開店したのはたしか其年の春頃であるが、年々に繁昌して今は屋内を改築して見違えるようになってゐる。

この路地には震災後も待合や芸者家が軒をつらねていたが、銀座通にカフェーはやの流行り始めた頃から、次第に飲食店が多くなつて、夜半過あかりに省線電車に乗る人と、カフェー帰りの男女とを目当に、大抵暁の二時ごろまで灯を消さずにいる。鮓屋すしの店が多いので、鮓屋横町とよぶ人もある。

わたくしは東京の人が夜半過ぎまで飲み歩くようになった其状況を眺める時、この新しい風習がいつ頃から起つたかを考えなければならぬ。

吉原遊ゆうかく廓かくの近くを除いて、震災前東京の町まちじゆう中で夜半過ぎて灯を消さない飲食店そばは、蕎麦屋より外はなかつた。

帚葉翁はわたくしの質問に答えて、現代人が深夜飲食の楽しみを覚えたのは、省線電車が運転時間を晝一時過ぎまで延長したことと、市内一円の札を掲げた辻自動車が五十銭から三十銭まで値下げをした事とに基くのだと言つて、いつものように眼鏡を取つて、その細い眼を瞬しばたきながら、「この有様を見たら、一部の道徳家は大に慨嘆するでしような。わたくしは酒を飲まないし、腥なまくさ臭いものが嫌いですから、どうでも構いませんが、もし現代の風俗を矯きようせい正しようと思うなら、交通を不便にして明治時代のようにすればいいのだと思います。そうでなければ夜半過ぎてから円タクの賃金をグット高くすればいいでしょう。ところが夜おそくなればなるほど、円タクは昼間の半分よりも安くなるのですからね。」

「然し今の世の中のことは、これまでの道徳や何かで律するわけに行かない。何もかも精力発展の一現象だと思えば、暗殺も姦かんいん淫も、何があろうとさほど眉しを蹙しかめるにも及ばないでしょう。精力の発展と云つたのは慾望を追求する熱情と云う意味なんです。スポーツの流行、ダンスの流行、旅行登山の流行、競馬其他博ばく奕えきの流行、みんな慾望の発展する現象だ。この現象には現代固有の特徴があります。それは個人めいめいに、他人よりも自分の方が優れているという事を人にも思わせ、また自分でもそう信じたいと思つている――

—その心持です。優越を感じたいと思っている慾望です。明治時代に成長したわたくしにはこの心持がない。あつたところで非常にすくないのです。これが大正時代に成長した現代人と、われわれとの違うところですよ。」

円タクが喇叭を吹鳴している路端に立って、長い議論もしていられないので、翁とわたくしとは丁度三四人の女給が客らしい男と連立ち、向側の鮓屋に入ったのを見て、その後について暖簾をくぐった。現代人がいかなる処、いかなる場合にもいかに甚しく優越を争おうとしているかは、路地裏の鮓屋に於いても直に之を見ることが出来る。

彼等は店の内が込んでいると見るや、忽ち鋭い眼付になって、空席を見出すと共に人込みを押分けて驀進する。物をあつらえるにも人に先じようとして大声を揚げ、卓子を叩き、杖で床を突いて、給仕人を呼ぶ。中にはそれさえ待ち切れず立って料理場を窺き、直接料理人に命令するものもある。日曜日に物見遊山に出掛け汽車の中の空席を奪取ろうがためには、プラットホームから女子供を突落す事を辞さないのも、こういう人達である。戦場に於て一番槍の手柄をなすのもこういう人達である。乗客の少い電車の中でも、こういう人達は五月人形のように股を八の字に開いて腰をかけ、取れるだけ場所を取ろうとしている。

何事をなすにも訓練が必要である。彼等はわれわれの如く徒歩して通学した者とはちがつて、小学校へ通う時から雑沓ざつとくする電車に飛乗り、雑沓する百貨店や活動小屋の階段を上下して先を争うことに能く馴ならされている。自分の名を売るためには、自ら進んで全級の生徒を代表し、時の大臣や頭官に手紙を送る事を少しも恐れていない。自分から子供は無邪気だから何をしてもよい、何をしても咎とがめられる理由はないものと解釈している。こういう子供が成長すれば人より先に学位を得んとし、人より先に職を求めんとし、人より先に富をつくろうとする。此努力が彼等の一生で、其外には何物もない。

円タクの運転手もまた現代人の中の一人うちいちにんである。それ故わたくしは赤電車がなくなつて、家に帰るため円タクに乗ろうとするに臨んでは、漠然たる恐怖を感じないわけには行かない。成るべく現代的優越の感を抱いていないように見える運転手を捜さなければならぬ。必要もないのに、先へ行く車を追越そうとする意気込の無さそうに見える運転手を捜さなければならぬ。若しこれを怠るならばわたくしの名は忍翌日たちまちの新聞紙上に交通禍の犠牲者として書立てられるであらう。

*

*

*

窓の外に聞える人の話声と箒ほうきの音とに、わたくしはいつもより朝早く眼をさました。臥ね床どしの中から手を伸して枕もとに近い窓の幕を片よせると、朝日の光が軒おおを蔽おほう椎しいの茂みにさしこみ、垣根際に立つている柿の木の、取残された柿の実を一層色濃ひとしおく照している。箒の音と人の声とは隣の女中とわたくしの家の女中とが垣根越しに話をしながら、それぞれ庭の落葉を掃いているのであった。乾いた木の葉この萩そうそう々としてひびきを立てる音が、いつもより耳元ちかく聞えたのは、両方の庭を埋うずめた落葉が、両方ともに一度に掃き寄せられるためであった。

わたくしは毎年冬の寢覚ねぐめに、落葉を掃く同じようなこの響をきくと、やはり毎年同じように、「老愁ハ葉ノ如ク掃ハラヘドモ尽キズ萩萩タル声中又秋ヲ送ル。」と言った館柳たちりゆうわん灣の句を心頭に思浮べる。その日の朝も、わたくしは此句を黙もくしやう誦しながら、寝間着のまま起たつて窓に倚よると、崖えのきの榎えのきの黄ばんだ其葉も大方散ってしまった梢こずえから、鋭い百舌もずの声こがきこえ、庭の隅に咲いた石躑つわぶき花きいろの黄きいろい花に赤蜻蛉とんぼがとまっていた。赤蜻蛉は数知れず透明な其翼をきらきらさせながら青々と澄渡つた空にも高く飛んでいる。

曇りがちであった十一月の天気も二三日前の雨と風とにすっかり定さだまって、いよいよ「一

年ノ好景君記取セヨ」と東坡とうばの言つたような小春の好時節になつたのである。今まで、どうかすると、一筋二筋と糸のように残つて聞えた虫の音も全く絶えてしまった。耳にひびく物音は悉ことごとく昨日きのうのものは變つて、今年の秋は名残りもなく過ぎ去つてしまつたのだと思うと、寝苦しかつた残暑の夜の夢も涼しい月の夜に眺めた景色も、何やら遠いむかしの事であつたような氣がして来る……年々見るところの景物に變りはない。年々變らない景物に対して、心に思うところの感懐もまた變りはないのである。花の散るが如く、葉の落おるが如く、わたくしには親しかつた彼かの人々は一人一人相ついで逝いつてしまつた。わたくしもまた彼の人々と同じように、その後を追うべき時の既に甚しくおそくない事を知つてゐる。晴れわたつた今日の天氣に、わたくしはかの人々の墓はらを掃はらいに行こう。落葉はわたくしの庭と同じように、かの人々の墓をも埋めつくしているのである。

昭和十一年丙ひのえね子十一月脱稿

青空文庫情報

底本：「※[#「さんずい+ (壘一土へん一厂)」、第3水準1-87-25] 東綺譚」新潮文庫、
新潮社

1951 (昭和26) 年12月25日発行

1978 (昭和53) 年4月10日40刷改版

2007 (平成19) 年1月15日79刷

入力：米田

校正：阿部哲也

2011年1月26日作成

2014年1月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

※ [# 「さんずい+ (壠-土へん-厂) 」 、第3水準1-87-25] 東綺譚

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>